岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（38）

小殿（おどの）遺跡（英賀郡衙推定地）
英賀（あが）廃寺

１９８０年３月

岡山県教育委員会

文　化　課

序

岡山県は豊かな自然環境と気候・風土に恵まれ，また歴史的にも古代より栄えたところであります。このため多くの遺跡が所在することから，文化財の保護保存については特に慎重に対処しておりますが，最近の大規模な県土開発事業の増加に伴い，文化財の保護保存上各種の問題を生じております。昭和54年度国庫補助事業として調査を実施しました小殿遺跡・英賀廃寺も，こうした開発との調整を図り，保護保存の資料を得ることを目的としたものであります。

小殿遺跡は調査の結果，掘立柱建物や陶硯が出土したことから，郡衙遺跡である可能性が強いものであります。また英賀廃寺につきましても，白鳳時代創建で方一町の寺域に，法起寺式あるいは観世音寺式の伽藍配置が想定できました。

本報告書は，この調査の成果をまとめたものであります。今後の文化財の保護保存に活用され，また地域の歴史を研究する資料として役立てば幸いであると存じます。

最後になりましたが，調査にあたっては専門委員をはじめ，北房町，北房町教育委員会，北房町文化財保護委員，地権者等関係各位から多くの支援と助言を得ました。さらに，地元の多くの方々には発掘作業に従事していただきました。あわせて厚くお礼申し上げます。

昭和55年３月

岡山県教育委員会

教育長　佐　藤　章　一

例　　言

1. 本書は岡山県教育委員会が国庫補助を受けて実施した「小殿遺跡・英賀廃寺緊急発掘調査」の報告である。
2. 遺跡は上房郡北房町上水田に所在する。
3. 発掘調査は平井　勝が担当し，専門委員の指導助言を得て，1979年10月11日から1980年2月8日まで実施した。
4. 発掘調査にあたっては北房町役場，北房町教育委員会，北房町文化財保護委員，地権者等関係各位より絶大なる援助を受けた。また発掘作業は下記の方々の協力を得て行われた。記して感謝の意を表したい。

   小殿遺跡　竹中央男，大原基一，工藤芳夫，池田清太郎，山本佐一，山本薫，宮本一幸，沖田トシ子，森岡久代，岡本き志よ

   英賀廃寺　坂本重吉，坂本芳夫，柿本喜市，柳田勇，武村三夫，清水弥三郎，山崎綾子，武村百夜，池田春子，坂本サトエ
5. 遺物の整理は文化課分室で平井が行った。なお遺物は瓦を北房町教育委員会に，その他は文化課分室において保管している。
6. 本報告書の執筆・編集は平井が担当した。

   報告書作成にあたっては，井上　弘，藤井守雄，山本悦世，北村智子の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
7. 発掘調査及び報告書作成にあたっては，下記の方々から指導・援助を得た。記して厚く御礼申し上げる次第である。

   稲田孝司（文化庁），井吹高志（北房町助役），伊藤　晃，柳瀬昭彦
8. 本書に使用した方位Nは真北を示す。これは磁北に対しN6°40′Eの偏倚角を有する。
9. 本書に使用したレベルは仮原点よりの高さを示す。
10. 本書第2図に使用した地形図は，国土地理院発行の2万5千分の1地形図（呰部）を複製したものである。

目　　次

第Ⅰ章　調査の経緯 …… 1
第Ⅱ章　古代英賀郡の地理的・歴史的環境 …… 2
第Ⅲ章　小殿遺跡 …… 5
　第1節　遺跡の位置と現状 …… 5
　第2節　調査の方法と調査経過 …… 6
　第3節　調査の概要 …… 9
　　Ⅰ・トレンチの概要 …… 9
　　Ⅱ・遺　構 …… 13
　　Ⅲ・遺　物 …… 15
　第4節　小　　結 …… 16
第Ⅳ章　英賀廃寺 …… 17
　第1節　寺院の名称と位置 …… 17
　　A・寺院の名称について …… 17
　　B・寺院の位置と現状 …… 17
　第2節　調査の方法と調査経過 …… 19
　第3節　調査の概要 …… 22
　　Ⅰ　寺院関係の遺構と遺物 …… 22
　　A・遺　構 …… 22
　　B・遺　物 …… 32
　　Ⅱ　寺院関係以外の遺構と遺物 …… 39
　　A・寺院創建以前の遺構と遺物 …… 39
　　B・寺院廃絶後の遺構と遺物 …… 40
　第4節　小　　結 …… 42
第Ⅴ章　結　　語 …… 45

図　目　次

第１図　古代英賀郡の古墳分布図 …… 3
第２図　遺跡の位置 …… 5
第３図　小殿遺跡の地形とトレンチ位置図 …… 7
第４図　建物全体図 …… 9
第５図　ＡＴ・ＡＴ南拡張区実測図 …… 10
第６図　ＢＴ（上）・ＤＴ（下）実測図 …… 11
第７図　ＥＴ実測図 …… 12
第８図　ＦＴ（上）・ＧＴ（下）実測図 …… 13
第９図　須　恵　器 …… 14
第10図　瓦 …… 14
第11図　英賀廃寺地形図 …… 18
第12図　トレンチ設定図 …… 19
第13図　塔心礎略測図 …… 22
第14図　塔平面図 …… 23
第15図　１Ｔ・４Ｔ実測図 …… 24
第16図　講堂平面図 …… 25
第17図　11Ｔ・14Ｔ実測図 …… 26
第18図　19Ｔ・13Ｔ・20Ｔ実測図 …… 27
第19図　３Ｔ・６Ｔ実測図 …… 28
第20図　16Ｔ・18Ｔ実測図 …… 29
第21図　21Ｔ・17Ｔ・23Ｔ実測図 …… 30
第22図　24ＡＴ・24ＢＴ実測図 …… 31
第23図　瓦の出土量 …… 32
第24図　軒　丸　瓦 …… 33
第25図　軒　平　瓦 …… 34
第26図　線刻文様瓦 …… 35
第27図　丸瓦・平瓦 …… 36
第28図　須　恵　器 …… 37
第29図　鉄　　釘 …… 38
第30図　弥生式土器 …… 39
第31図　中世の遺構 …… 40

第32図　土　師　器 …… 41
第33図　伽藍推定図 …… 42
第34図　吉備寺式瓦の分布図 …… 44
第35図　岡山県の寺院分布図 …… 45
第36図　北房町の古墳分布図 …… 46

図　版　目　次

図版1　1・小殿遺跡の遠景（北から）
　　2・小殿遺跡の近景（東から）
図版2　1・ＡＴの遺構（南東から）
　　2・ＡＴ南拡張区の遺構（東から）
図版3　1・ＡＴ南壁断面（北から）
　　2・ＡＴ南拡張区柱掘方検出状態（南から）
図版4　1・ＢＴ（南から）
　　2・ＤＴの遺構（南から）
図版5　1・ＤＴ西拡張区の遺構（東から）
　　2・ＡＴ・ＤＴの遺構全景（南から）
図版6　1・ＦＴ（南東から）
　　2・ＧＴの遺構（南から）
図版7　1・須　恵　器
図版8　1・英賀廃寺の遠景（南から）
　　2・瓦窯の遠景（西南から）
図版9　1・作 業 風 景
　　2・作 業 風 景
図版10　1・塔遠景（東から）
　　2・１Ｔ瓦溜り（東から）
図版11　1・塔基壇（西から）
　　2・１Ｔ塔基壇（西から）
図版12　1・１Ｔ瓦溜り断面（南から）
　　2・塔心礎抜き取り穴
図版13　1・４Ｔ瓦溜り（西から）
　　2・４Ｔ塔基壇（西から）
図版14　1・４Ｔ塔基壇（東から）

2・2ＡＴ断面（西から）
図版15　1・3Ｔ（西南から）
2・3Ｔ（北西から）
図版16　1・4Ｔ回廊（東から）
2・6Ｔ回廊（南から）
図版17　1・講堂全景（南から）
2・11Ｔ（南から）
図版18　1・13Ｔ（南から）
2・20Ｔ（北から）
図版19　1・14Ｔ（南から）
2・19Ｔ（東から）
図版20　1・講堂・回廊取り付け部全景（南から）
2・南門周辺トレンチ全景（北から）
図版21　1・8ＡＴ（北から）
2・8ＡＴ断面（南から）
図版22　1・14Ｔ（北から）
2・16Ｔ（南から）
図版23　1・18Ｔ（南から）
2・23Ｔ（東から）
図版24　1・寺域南東部（西北から）
2・寺域東部（西から）
図版25　1・寺域西北部（南東から）
2・埋め戻し風景（南から）
図版26　1・軒丸瓦1
2・軒丸瓦2
図版27　1・軒丸瓦3
2・軒丸瓦4
図版28　1・軒丸瓦5
2・軒丸瓦6
図版29　1・軒平瓦1
2・軒平瓦2
図版30　1・軒平瓦3
2・線刻文様瓦
図版31　1・須恵器
図版32　1・弥生式土器

図版33　1・土師器

図版34　1・鉄釘

　　2・小殿遺跡表採の線刻瓦

第Ⅰ章　調査の経緯

岡山県内の寺院址についての研究は永山卯三郎の「岡山県通史」にはじまる。英賀廃寺もこれにより，世に知られるところとなったが，また同時に「上水田村に英賀郡の郡神社現存すること。英賀郡家の址が此地に存すること亦推定に難からざること。」という注目すべき見解を述べている。しかしながら郡衙に関してはこれ以後何ら論議されることなく今日に至っている。一方英賀廃寺については近年の寺院研究の中で備中北部唯一の寺院として，あるいは「吉備寺式」軒丸瓦を出土する寺としてとりあげられている。

昭和53年6月，岡山県教育委員会は北房町下中津井に所在する土井2号古墳の発掘調査を実施していたが，そこに井吹高志（現北房町助役）氏が1枚の丸瓦片を持参された。瓦は裏に布目を，表に平行タタキ目を有するもので，上水田小殿地区の圃場整備により郡神社横の水田より出土したと言うことであった。調査を担当していた平井はさっそく現地に出向き，出土状況等を聞取るとともに，多量の土師器，須恵器を採集した。須恵器には奈良時代のものもあり，瓦の出土もあわせて官衙遺跡である可能性が強いものと考えられた。それにつけても残念であったのはすでに圃場整備が終了していたことであった。しばらくして今度は英賀廃寺の寺域内で地権者個人が圃場整備を実施するという計画が知らされた。加えて北東にある中国縦貫自動車道北房インターに近いことから，関連の開発も予想され，早急に遺跡の性格を明らかにして，保護・保存の対策を講じる必要性が生じた。そこで英賀郡衙，英賀廃寺について遺跡の性格を明らかにし，また寺域・主要伽藍を明確にすることによって保存を図る資料を得るため，国庫補助を受けて発掘調査を実施することとなった。英賀廃寺はその後個人の圃場整備は中止となったが，団体営の圃場整備が計画されている。

調査は専門委員の指導助言を得て，昭和54年10月11日より昭和55年2月8日まで実施した。なお調査にあたっては北房町役場，北房町教育委員会をはじめ，北房町文化財保護委員，地権者等関係各位には終始温かい援助をいただいた。また作業については地元住民の方々に協力を得た。記して厚くお礼申し上げます。

調査体制

専門委員		文化財主幹	光吉勝彦
岡山理科大学教授	鎌木義昌	文化財二係長	河本　清
岡山大学教授	近藤義郎	主任	林　正人
岡山女子高等看護学院教頭	水内昌康	文化財保護主事	松本和男
		〃	柳瀬昭彦
		〃	平井　勝（調査担当者）
岡山県教育庁文化課		〃	岡本寛久
課長	近藤信司		
課長補佐	吉光一修		

第II章　古代英賀郡の地理的・歴史的環境

遺跡の所在する北房町は，岡山県の北西部に位置し，東は落合町，北は大佐町，西は新見市，南は高梁市と有漢町に接している。旭川の一支流である備中川は，北房町上呰部を水源として南下し，上水田で中津井川と合流して流路を東にむけ落合町で旭川にそそぐ。この備中川によって形成された北房町の平野部は，下流の落合町との境界付近で狭くなっており，これを吉備高原が取り囲んで盆地状を呈していることから，自然地形を見ると単位地域として捉えられる所である。さらに詳細に見るならば下呰部から上流の平野部，中津井川流域の平野部，そして上水田・水田の広い平野部の3小地域に分離することができる。

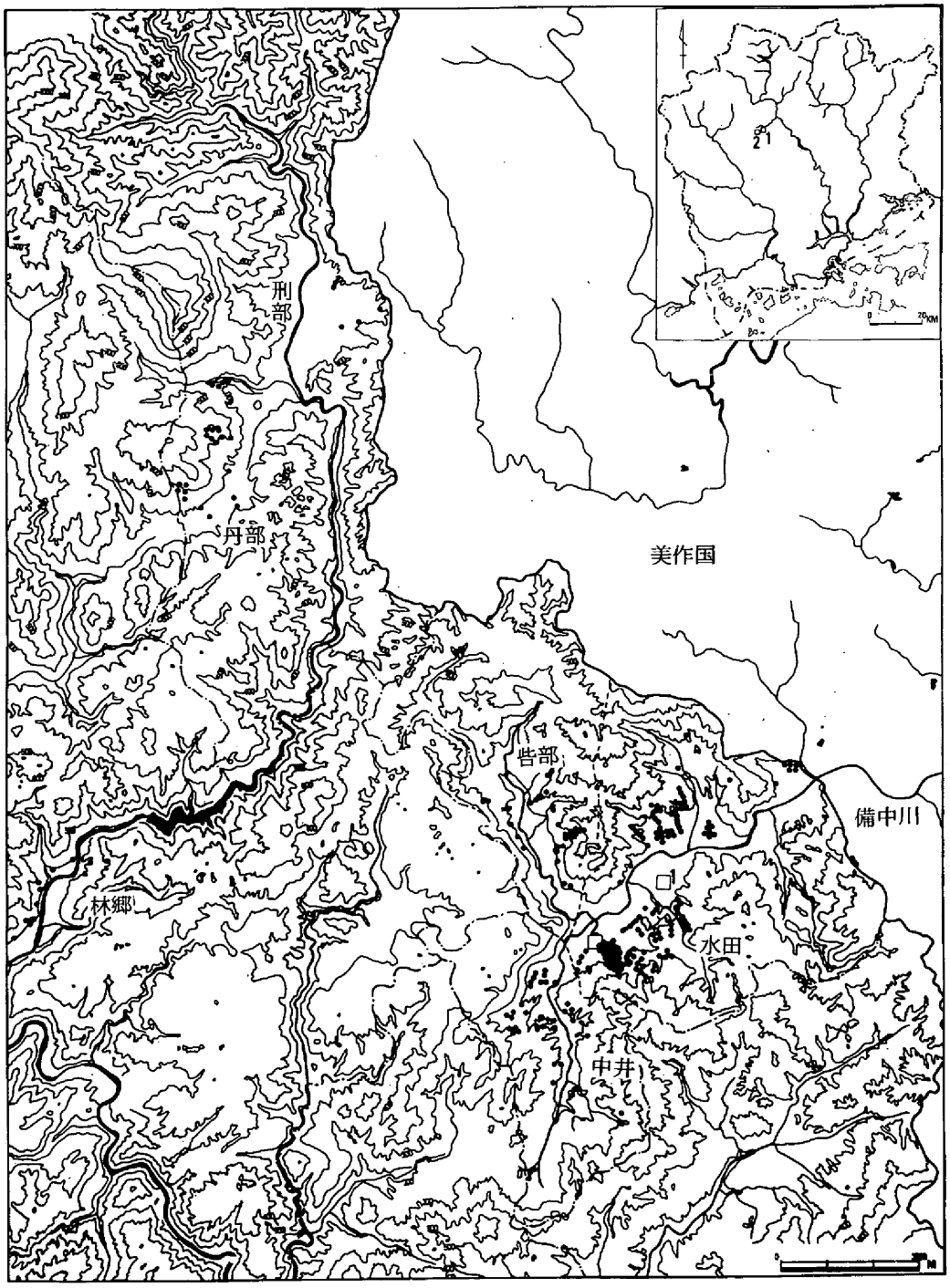
さて現在北房町は上房郡に属するが，古代においては英賀郡の一部であることから，もう少し広い範囲，つまり古代英賀郡の地理的概観をしておこう。まず古代英賀郡の範囲を概略的に示せば，北房町とその北に位置する大佐町，そして西側の吉備高原と，それをこえた新見市唐松の地域を含むと推定され，備中国では北東端に位置し，東は美作国に接している。地理的に見るとこれらの地域は水系が異なり，また山などによって区切られていることから比較的結びつきが弱い。つまり大佐町，あるいは新見市唐松は高梁川支流の小阪部川流域を生産基盤としており，旭川支流の備中川を生産基盤とする北房町方面とは吉備高原によって遮られている。

地理的に概観したかかる地域は，大略古代英賀郡の範囲であるが，「和名類聚抄」によれば英賀郡は水田（美都多），呰部（安多），中井（奈加都井），刑部（於佐加倍），丹部（多知倍），林郷の6郷よりなっていることが知られる（註1）。今これらの郷を先に見た地域に比定すると，上水田・水田地域は水田郷に，中津井川流域は中井郷，下呰部より上流の備中川両岸は呰部郷，小阪部川流域の大佐町小阪部は刑部郷，同じく下流の田治部は丹部郷，さらに下流の高梁川にそそぐあたりの新見市唐松は林郷として，大略は間違いないものと思われる。

次にこれら各郷に比定される地域の古墳分布を概観するが，内容の明らかなものは僅かしかないことから大きく前期と後期に分け，横穴式石室を有するものは後期古墳とし，その他については時期不明，あるいは前期古墳としておく。

まず刑部郷に比定される大佐町小阪部の地域であるが，小阪部川によってやや広い沖積地が形成され，その東側丘陵上に古墳が僅かに点在している。そのほとんどは後期古墳と考えられるが，群集するものはない。しかし近年調査された円通寺古墳群（註2）のように，埋もれているものもあり，数は多少増えることはあるが，大勢は変わらないものと考えられる。

小阪部の南側に位置する大佐町田治部は丹部郷に比定される。田治部は小阪部川にそった狭い沖積地と，小南から南東に流れる小阪部川支流両岸に沖積地が認められ，古墳は後者の丘陵上に点在している。この地域の古墳は地理的制約からか，かなり比高差のある丘陵上に古墳を築造しており，そのほとんどが後期古墳と考えられるが，内容の不明なものが多い。ただ小阪部と田治部の中間に位置す



1. 英賀廃寺　2. 小殿遺跡

第1図　古代英賀郡の古墳分布図

る漆原では竪穴式石室が発掘されており（註３），前期古墳も存在した可能性が強い。

小阪部川が高梁川にそそぐあたりの新見市唐松は林郷に比定され，やや広い沖積地が形成されている。この沖積地両側の丘陵上に僅かながら後期古墳が点在しているが，古くはもっと存在したようである（註４）。その多くは後期古墳と考えられ，塚元ノ塚からは風景絵画を線刻した平瓶なども出土している。

続いて備中川流域に目を転じてみよう。備中川の源である呰部の地域は呰部郷に比定され，南北に細長い沖積地が形成されている。この沖積地の奥部には前期と考えられる全長30mの前方後方墳（小田鼻古墳）が築造されている。また中間の東側丘陵上には全長20mの前方後円墳がある。これらの古墳は５世紀段階で一時的に顕在化した呰部地域首長の墓と考えられる。この地域のその他の古墳はほとんどが横穴式石室を有する後期古墳と考えられる（註５）。後期古墳では下呰部の桃山１号墳（註６）が他の古墳に比較して大型であり，また呰部郷への出入口に位置していることから注目されるものである。

中津井川流域は中井郷に比定され，両岸に狭いながらも南北に細長い沖積地を形成している。その古墳は丘陵上に点在し，ほとんどが横穴式石室を有する（註７）後期古墳であるが，土井には横穴も認められる。この地域では後期になると特に大型の古墳が築かれるようになり，大型の横穴式石室を有する前方後円墳定東塚，そして終末期の古墳と考えられる方墳の大谷１号墳など，英賀郡全域の首長墓と考えられるものが築造されている。また中井郷の出入口にあたる，下中津井には金銅装の椎頭大刀を出土した土井２号古墳がある（註８）。

英賀郡衙，英賀廃寺の所在する水田郷はこれまでの地域にくらべ最も広い沖積地が形成されている。両岸には多くの古墳が築造されるが，特に備中川の南側低丘陵上には，のちの英賀郡に相当する地域を支配してきた首長の墓が系列的に認められる。これは最も古いと考えられる前方後方墳の荒木山東塚をはじめ，前方後円墳の荒木山西塚，全長80mの前方後円墳立１号墳，帆立貝式の前方後円墳と考えられる立３号墳であり，後期になると中津井に築造されるようになる。　またこれら首長墓の周辺には後期古墳が群集しており，横穴も認められる。上水田では備中川北側丘陵は急峻になっていることから古墳は少ないが，同じ北側でも五名周辺では低丘陵が発達しており，その丘陵上には低い墳丘をもつ前期古墳が群集している。

註

註１　池邊　彌『和名類聚抄郷名考證』　1966年

註２　田仲満雄『円通寺古墳』大佐町文化財シリーズ第１集　1978年

註３　松尾惣太郎『新見市史』　1965年

註４　註３に同じ。

註５　田仲満雄「空古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査６』　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11　1976年

註６　田仲満雄，福田正継，竹田　勝他「桃山遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査７』　岡山県教育委員会　1976年

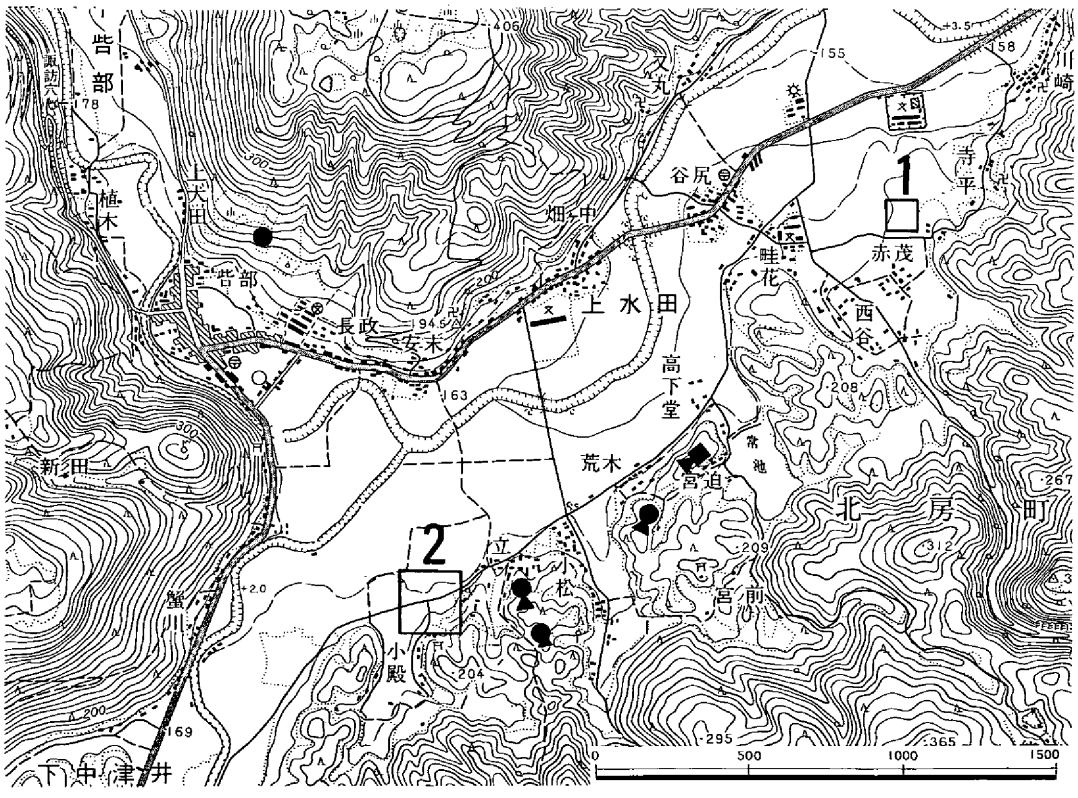
註７　伊藤　晃『大谷３号墳』　北房町教育委員会

註８　平井　勝『土井２号古墳』　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告29　1979年

第Ⅲ章　小　殿　遺　跡

第１節　遺跡の位置と現状

遺跡は上房郡北房町上水田小殿に所在する。北房町上呰部を水源とする備中川は，上水田で中津井川と合流し，流路を東北に向け東に接する落合町で旭川に注ぐ。この備中川流域には沖積地が形成されているが，上水田，水田地域では特に発達している。小殿遺跡はこの上水田の備中川と中津井川の合流地点南側丘陵裾部に位置し，前面には広い沖積地を見下し，背後は低丘陵をはさみ吉備高原となっている。このため山裾は日当りが悪いことから通称陰地（オンヂ）と呼ばれている。しかし遺跡の分布を見ても，大古墳をはじめ，各時期の遺跡が備中川より南側に多く認められる。これが水田地域になると反対になる。これは上水田地域では南側に低丘陵が発達し，北側では急斜面で吉備高原へ連なることによるものと思われる。このように遺跡の立地する場所は歴史的にも地理的にも優位であっ



1　英賀廃寺　2　小殿遺跡

第２図　遺跡の位置

たと考えられる。

遺跡は沖積地より一段高い丘陵裾部にあたる。ここは小字名に高下という地名が認められることから高操の地であったと考えられ，郡神社を中心として東西約 200mの範囲が高くなっている。西は谷川によって区画され，それより東が約2m高くなり，東端は南側から突出した丘陵で区切られている。北側は丘陵がせまり，その裾部は畑となっているが，その他は水田で，すでに圃場整備が完了している。少し詳細に見ると，郡神社境内地は南より突出した丘陵裾部にあたり，これより参道付近が最も高いレベルを示している。これより西へは少しずつ低くなり，西端を区切る谷に接する水田まで約3mの落差がある。参道の東側は小さな谷地形となるが，東端を区切る丘陵まではほぼ平坦になっている。南は標高 180mの山際が境となるが，北端については推定が難しい。

第2節　調査の方法と調査経過

調査は圃場整備によって瓦が出土した地点を中心に，遺跡が存在すると考えられる東西約200m，南北約100mを対象としたが，調査期間が短いことと，水田部分は圃場整備により撹乱されていることが予想されることから，主として畑地を中心にトレンチによる調査を実施した。トレンチの設定は郡衙推定地ではあるが，瓦出土地点以外手がかりがないことから，特に基準線を設定することなく，地形に応じて原則として幅3mとした。

調査は10月11日より開始され，まず一番山際にある畑地で，しかも瓦出土地点に近い位置にAトレンチを設定した。このAトレンチ南端より方形の大きな柱掘方が検出されたことから，南端から西方向に直角で拡張し，さらに建物の規模を追求するため，Aトレンチとの間に土手を残してその南側に拡張区を設定した。これにより建物の主軸方向は決定したが，南端については暗渠排水と農道のため確認できなかった。

Bトレンチは圃場整備の終了した水田に設定したが，柱穴2本を検出しただけである。

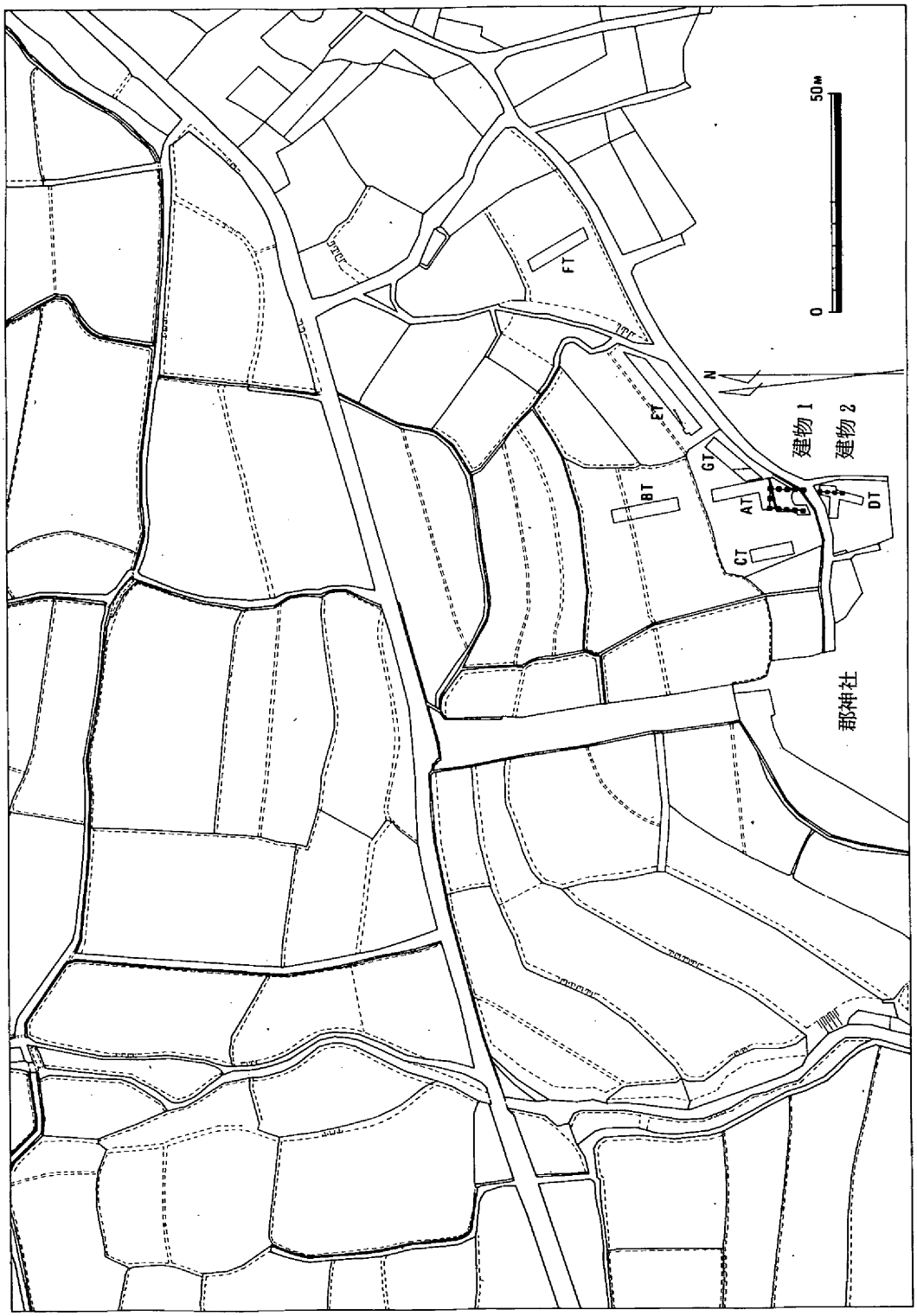
Cトレンチは建物の西側に設定したが，谷部となっており，約2m掘り下げた時点で破壊し，完掘できなかった。しかし遺物は多く，瓦片，須恵器，土師器，フイゴの羽口などが出土した。

Aトレンチで検出した建物が，農道よりさらに南側に延びる可能性があることから，農道南側の畑にDトレンチを設定した。遺構面が深いことと，湧水が多いことから，困難な状態ではあったが，一辺60cm前後の方形掘方を3間分検出した。これが建物となるのか，柵となるのかを追求するため一部を西に拡張してみたが，対になる掘方は確認できなかった。

EトレンチもAトレンチとほぼ同じレベルの畑に設定した。耕作土直下は黄褐色の地山となり，その面で時期不明の建物の一部を検出した。

Fトレンチは東側の丘陵上に位置する畑であるが，弥生式土器が若干出土した以外は何ら遺構は検出されなかった。

Gトレンチは建物を区画する遺構がないかどうかを確認するために設定した。幅3mなので断定はできないが，円形の柱穴列が検出されたことから柵の可能性も考えられる。



第 3 図　小殿遺跡の地形とトレンチ位置図

日誌抄

1979年10月11日　発掘調査開始。Ａトレンチ（ＡＴ）を設定し表土剝ぎを行う。

12日　ＡＴの掘り下げ。瓦片，土師器，須恵器が少量出土。

15日　ＡＴの地山面で遺構検出。ＢＴを設定し表土剝ぎを行う。

16日　ＡＴの遺構掘り下げ。ＢＴの表土剝ぎを行う。

22日　トレンチ内の水の排水作業。ＡＴ西拡張区を設定し表土剝ぎを行う。

23日　ＡＴ西拡張区遺構検出。大型の方形掘方が検出された。ＣＴを設定し表土剝ぎを行う。

24日　ＣＴ掘り下げ。ＡＴ南拡張区を設定し表土剝ぎを行う。

25日　ＡＴ南拡張区の黒色土層上面で方形掘方を検出。ＤＴを設定し表土剝ぎを行う。

26日　ＤＴの掘り下げ。ＡＴ西拡張区，ＡＴ南拡張区の遺構検出作業。

29日　ＢＴの掘り下げ。ＡＴ西拡張区，ＡＴ南拡張区大型掘方の掘り下げ。

30日　ＣＴの掘り下げ。奈良時代の須恵器，土師器片出土。

31日　ＥＴを設定し表土剝ぎを行う。ＣＴ掘り下げ。

11月1日　ＣＴの掘り下げ。ＦＴを設定し表土剝ぎを行う。ＥＴの遺構検出作業。

6日　ＦＴは遺構なし。ＥＴ遺構掘り下げ。ＧＴを設定し表土剝ぎを行う。

7日　ＧＴの遺構検出。ＢＴの遺構検出作業。

8日　ＤＴ掘り下げ。ＡＴ，ＡＴ西・南拡張区の写真。

9日　ＤＴ掘り下げ。黒褐色土層上面で方形掘方列を検出。

12日　トレンチ内の排水。ＤＴ西拡張区を設定し表土剝ぎ。

13日　トレンチの位置測量。ＣＴの埋め戻し。

14日　ＣＴ埋め戻し。ＡＴ平面実測。ＢＴ，ＦＴ断面実測。ＤＴ西拡張区遺構検出。

15日　ＢＴ埋め戻し。ＤＴ平面実測。

16日　ＢＴ埋め戻し。ＡＴ南壁断面実測。ＥＴ埋め戻し。

19日　トレンチ内の排水後清掃。ＡＴ埋め戻し。

29日　ＡＴ埋め戻し。

30日　ＤＴ埋め戻し。

12日3日　埋め戻し完了。機材整理。調査を終了する。

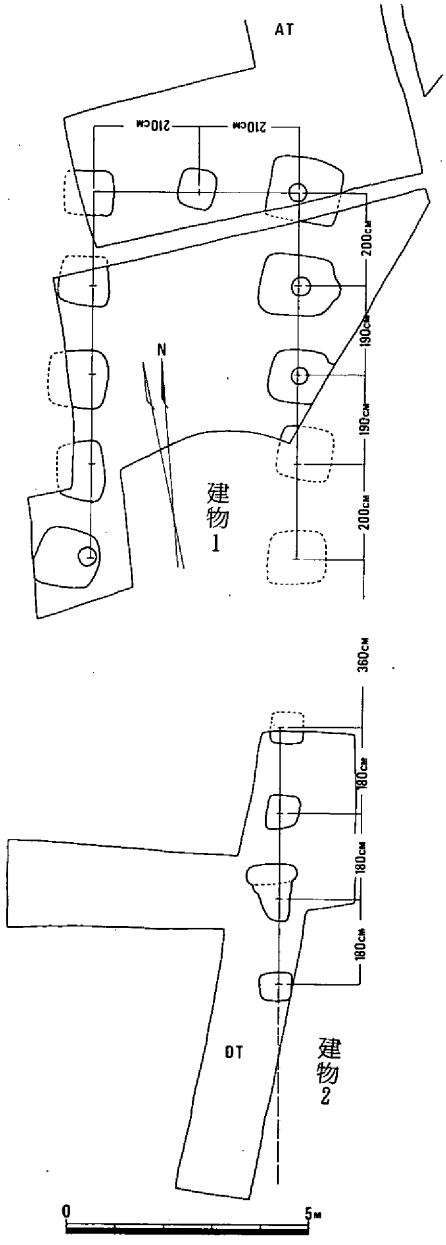
第3節　調査の概要

Ⅰ　トレンチの概要

Aトレンチ　ＡＴは瓦が出土した水田より一段高い南側の畑に設定したもので，ＡＴ，ＡＴ西拡張区，ＡＴ南拡張区とに分れる。ＡＴはほぼ南北に設定され，南端は耕作土直下は黄褐色地山となるが，北に向けて深くなってゆく。北側では地山の上に黒褐色土，さらに暗茶褐色土が堆積している。黒褐色土層には古墳時代の須恵器や土師器，さらに弥生式土器も含まれており，暗茶褐色土層には奈良時代の須恵器や瓦を包含している。遺構は北端に古墳時代後期の遺物を含む土壙状のものが検出され，中間には弥生時代中期後半の遺物を含む住居址状遺構がある。南側では１間×２間の建物が検出され，桁行総長4.5m，梁行総長2.4mを測る。遺物を伴わないので確実ではないが，柱穴内の埋土から奈良時代以前のものと考えられる。また南端では大型の方形柱掘方が検出され，建物１とした。

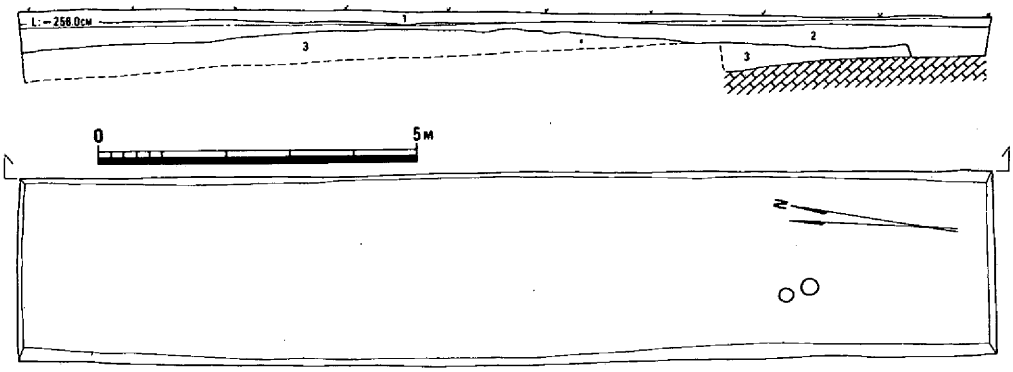
ＡＴ西拡張区はＡＴの南端から西へ直角に設定した。このトレンチでも西側へ向って深くなっており，ＡＴ北端と同じような土層が観察される。このトレンチ南側の断面で観察するかぎり，建物１の柱掘方は暗茶褐色土層上面より掘り込まれている。西端の梁行の柱は黒褐色土層で検出したが，これはこの層になり，暗茶褐色土に地山粒を含む土が認められたことから検出できたもので，この上の暗茶褐色土層では検出不可能であった。

ＡＴ南拡張区もＡＴ西拡張区の土層と同じで，建物１の柱掘方は黒褐色土上面で検出した。周辺からは若干の奈良時代の須恵器と瓦片が出土した。建物１の柱掘方については一部しか掘り下げてなく，遺物が伴出していないので時期は明確にし難いが，周辺の遺物などから奈良時代のものと考えている。

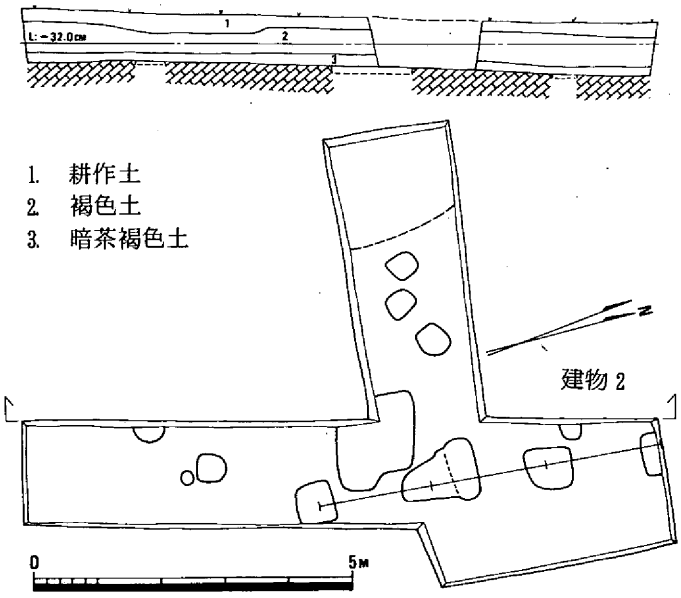


第４図　建物全体図

第5図　A T・A T南拡張区実測図

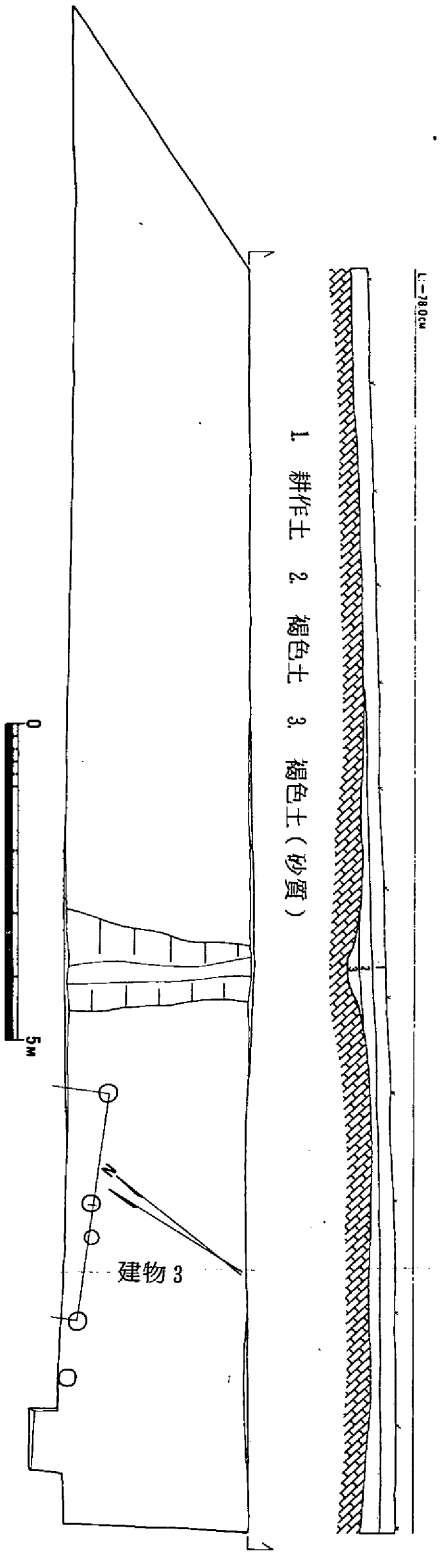


1. 耕作土　2. 造成土（圃場整備）　3. 暗茶褐色土



第6図　BT（上）・DT（下）実測図

Bトレンチ　ATと軸を揃えて北側の一段近い水田に設定した。この水田部は圃場整備が完了しており，削平された場所，あるいは盛土部分もあるが，設定した場所は一部古墳時代の遺物を含む層が削平されてはいるが，盛土の部分であった。しかし遺構は南端の一部地山面まで掘り下げた所より柱穴が出土しただけであった。その他の部分については黒色土層上面で遺構検出を行い，それ以下は掘り下げなかった。



第7図　ＥＴ実測図

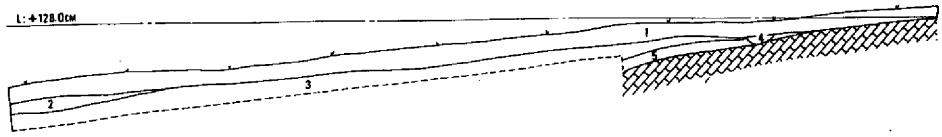
Ｃトレンチ　ＡＴと同じ畑の西側にほぼ南北に設定したが，谷部であったことから，2 *m*掘り下げた段階で奈良時代の瓦，須恵器，土師器などが出土した。断面実測前に倒壊してしまったことからすぐ埋め戻した。

Ｄトレンチ　ＤＴはＡＴの南側の畑に設定した。このトレンチにおいてもＡＴとほぼ同じような堆積状況が観察できるが，客土が厚く認められるため，深く掘り下げている。遺構は黒褐色土層上面で方形の柱掘方を検出し，建物2とした。この建物2の規模を知るためＤＴ西拡張区を設定したが，湧水と時期不明の住居址と考えられる落込みがあることなどから，明確にできなかった。したがって3間分の柱掘方しか明らかでないが，建物1と同じ方位の建物と考えられ，柱間寸法は1.8 *m*を測る。

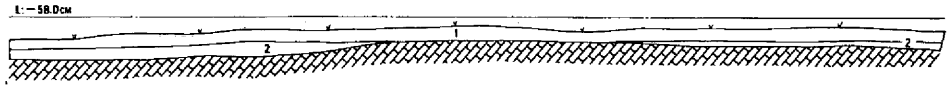
Ｅトレンチ　ＡＴと同じレベルの東端に位置する畑に設定した。耕作土直下は地山となっている。遺構は西側で柱穴を検出し，北にのびる建物と考えられるが，時期については明らかでない。柱間寸法は180 *cm*となり，方形掘方と同じ柱間になることから，関係する時期のものとも考えられる。

Ｆトレンチ　ＥＴの東側丘陵上に位置し，一段高い畑である。このトレンチからは何の遺構も検出されなかった。地山は北に向って深くなり，その上に黒褐色土，暗茶褐色土層が堆積し，これらの層中より若干の弥生式土器が出土した。

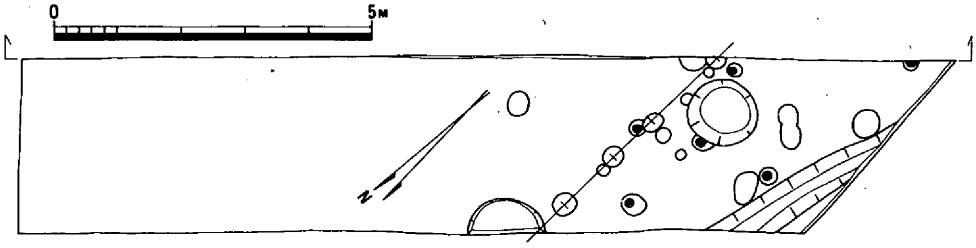
Ｇトレンチ　ＡＴ東側に設定したもので，耕作土直下は地山となる。遺構は西側に集中し，特に柵列と考えられる柱穴列より東側にはなかった。柵列状の柱穴列はほぼ南北に軸をとっているが，建物との時期的な関係は不明である。また3 *m*幅のトレンチであるため，この柱穴列がどの程度の規模のものであるか，あるいはほんとうに柵列かどうかは明確でない。西端で検出した溝はＡＴより続くもので，近世のものと考えられる。



1. 耕作土　2. 褐色土　3. 暗茶褐色土　4. 褐色土　5. 黒褐色土



1. 耕作土　2. 褐色土



第8図　FT（上）・GT（下）実測図

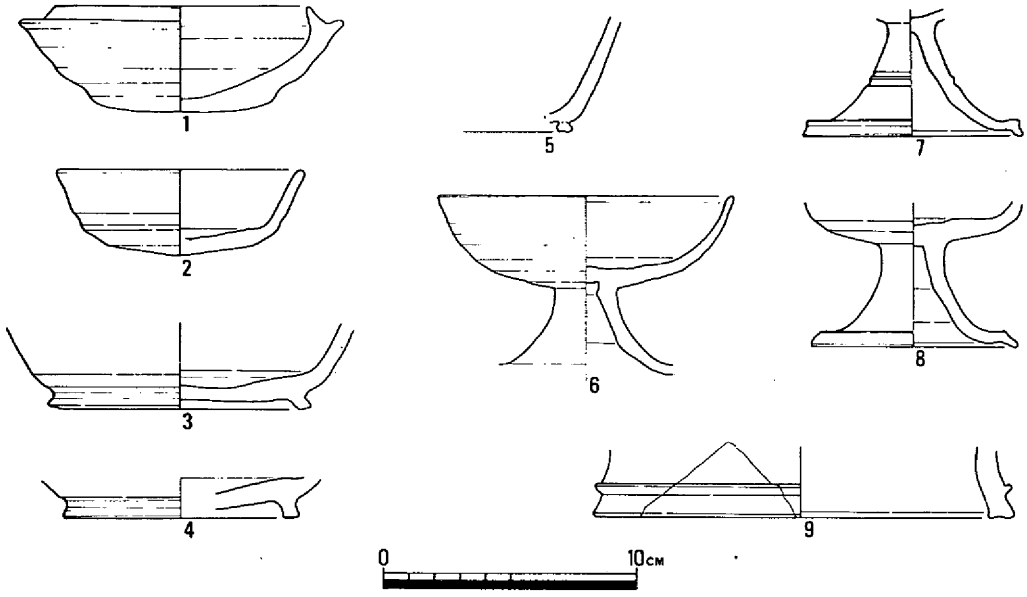
Ⅱ　遺　　構

トレンチ調査によって検出された遺構はATの建物1と，その南側に建物1と方位を同じくするDTの建物2，そしてGトレンチの柱穴列，さらにEトレンチの建物3がある。

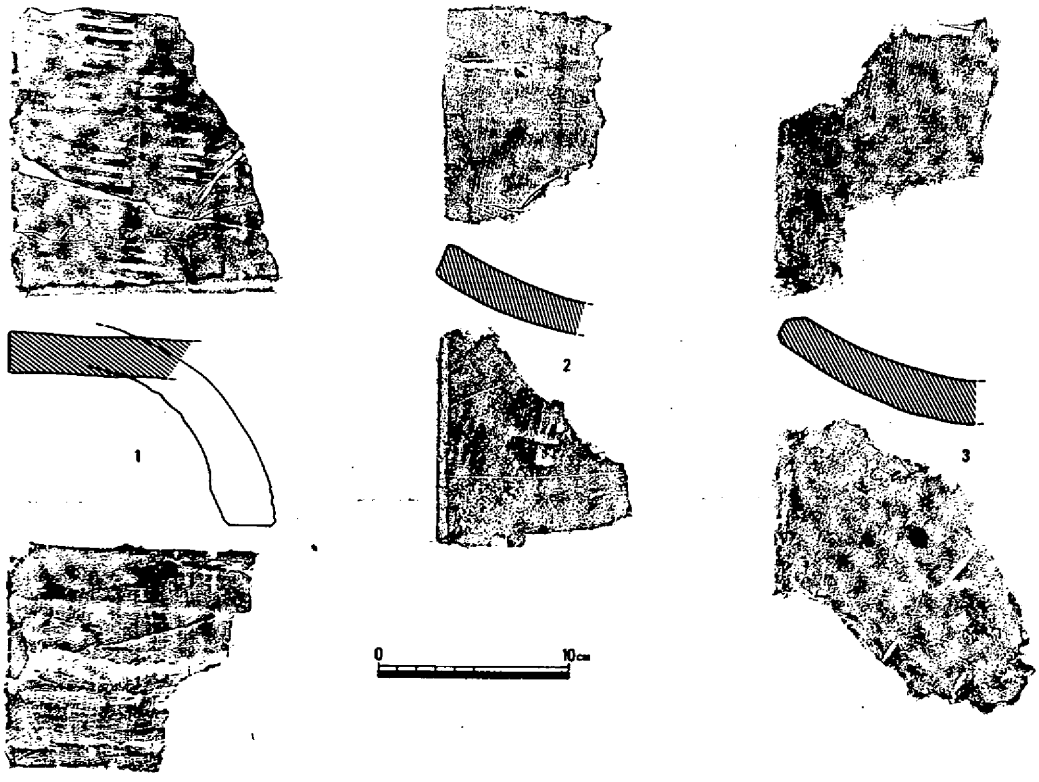
建物1　主軸を真北より東に4度振るが，2間×4間以上の南北棟建物となる。南側については農道があるため明確にし得なかったが，DTの柱掘方の関係から4間で終るものと考えられるが，あるいはもう1間分南にのびる可能性も残る。つまりDTの建物2の柱間寸法が180cm間隔となっており，その北端から建物1の南端掘方まで2間分あることから，建物1がもう1間分南にあってもよいと考えられる。柱掘方はほぼ方形を呈し，1辺が120～140cmを測る。掘方は一部しか掘り下げていないが，柱痕は掘方の底まで達しておらず，一度土をたたきしめた上に乗せている。さらにその周囲を版築状にたたきしめているのが観察できる。柱間寸法は桁行の両端が2m，中は1.9m，梁行は2.1mを測る。

建物2　建物1と同じ南北棟の建物で柱掘方は1辺約70cmの方形を呈し，180cm間隔でならぶ。南側はまだ延びる可能性がある。掘方内の土は暗茶褐色を呈していた。

建物3　GTの柱穴列は径約25cmの円形を呈しており，その間隔も一定していない。いずれも同じ



第9図　須　恵　器



第10図　　瓦

土が埋まっていたことと，軸がそろっているので柵状のものと考えた。ＥＴで検出したが，一部であり規模は不明である。柱穴は円形を呈し，柱間寸法は1.8ｍを測る。

Ⅲ 遺　　物

遺物は弥生式土器，土師器，須恵器，瓦，鞴の羽口など，弥生時代から中世に至るものが出土しているが，遺構に伴うものは少なく，大部分は包含層より出土したものである。

須恵器（第９図）

１は杯身で，Ｃトレンチより出土した。口径10cm，器高4.2cmを測る。口縁部立上りは短く，内傾が著しい。調整は体部が内外面とも横ナデ，底部は平坦で内外面ともナデによって仕上げられる。

２はＤトレンチより出土したもので，杯身と考えられ，推定口径10cm，器高3.5cmを測る。器形はやや尖りぎみの天井部より外反しながら立上る口縁部を有し，端部は丸くおさめている。

３は杯身で，Ａトレンチより出土した。底部には「ハ」の字状にふんばった貼付高台がつき，下端部は横ナデによる凹部がめぐる。底部下面は左方向のヘラ削りがなされる。色調は青灰色を呈する。

４は杯身底部の断片で，Ｃトレンチより出土した。底部は中央部が丸みをもって下がっている。高台は断面「ハ」の字形を呈し，下端は平坦である。

５も杯身底部の断片で，Ｃトレンチより出土した。高台は断面が左右に圧縮されたような形状を呈している。口縁部は外反しながら立上り，やや器高の高いものとなるであろう。

６は高杯でＡトレンチ南拡張区より出土したものである。杯部口径は12cm，器高は推定で約８cmを測る。杯部は概して丸みをもっており，低く外方に強くふんばった脚台がつく。暗青灰色を呈する。

７は高杯の脚台部で，Ｄトレンチより出土した。脚裾は強く外方にふんばっており，端部外面は強い横ナデによる凹部がめぐる。筒部には２条の沈線がめぐる。色調は青灰色を呈する。

８も高杯で，Ｄトレンチより出土した。杯部はやや平坦な底部から外反ぎみに立上る口縁部をもつものと考えられ，脚台は外方に強くふんばっている。色調は淡灰色を呈している。

９はＤトレンチより出土したもので，硯の脚台部と考えられる。脚端に近い位置に凸帯が１条めぐり，下端部は横ナデによる凹部がめぐる。内外面とも横ナデで丁寧に調整され，暗青灰色を呈する。

瓦（第10図）

瓦はＡトレンチ，Ａトレンチ南拡張区が多く，Ｃトレンチからも出土している。しかし全体の量は少なく，平瓦と丸瓦がポリ箱に１箱程度である。

１は丸瓦片で，圃場整備によって出土したものである。表面には線刻による文字状のものが認められる。表面は平行のタタキ目が，裏面には細かな布目が認められる。胎土に砂粒を含み，淡褐色を呈する。なお裏面には丹の痕跡が認められる。

２と３はＡトレンチ南拡張区より出土したもので，平瓦片である。２は表面に細かな布目が，裏面は平行叩目が認められるが，ナデにより消されている。胎土に砂粒を含み，灰褐色を呈する。３も表面に細かな布目が認められ，裏面はナデにより叩目が完全に消されている。赤褐色を呈する。

第4節　小　　結

今回の調査は遺跡の性格を明らかにすることが目的ではあったが，範囲が広いのに加えて，瓦が出土したという以外何の手掛りもないことから，トレンチの設定は全く任意に行った。幸いにしてＡＴ・ＤＴなどで方形の掘方をもつ掘立柱建物を検出したが，その規模や配置については不明な点が多い。したがって現時点で早急に結論を出すことは差し控えたいが，調査によって明らかになったことを整理し，ある程度遺跡の性格を考えてみたい。

まず掘立柱建物であるが，建物３以外は方形で大型の柱掘方であり，柱間寸法も天平尺で割り切れるものが多い。また建物１と２は棟を揃えており，計画的な建物配置が想定できる。いずれも南北棟建物であるが，方位は真北に対し４度東に傾いており，これは英賀廃寺と同じ方位となる。

遺物は遺構に伴うものではないが，奈良時代の須恵器などが出土することから，建物１・２はその時期のものと考えられる。また瓦片が出土することから，瓦葺の建物が近くにあったことが考えられる。瓦は英賀廃寺の白鳳期のものに類似している。さらに１点ではあるが陶硯が出土しており，有識字階層の存在したことが考えられる。

以上整理した点から，つまり計画的配置をもつ建物群が想定され，その中には瓦葺の建物も考えられ，陶硯が認められることは官衙の可能性を強く感じさせるものである。

かかる理由から官衙である可能性を指摘したが，どのような官衙であったかが問題となる。官衙には国衙・郡衙・郷倉・軍団・駅屋などがあるが，交通の要衝の地ではない英賀郡では軍団や駅屋は考えられず，国衙もまた総社市に想定されていることから，考えられるのは郡衙と郷倉である。郷倉については調査資料が少ないことから詳細な検討は保留しておきたいが，郡衙については近年資料が増加しつつある。岡山県においては久米郡衙（註１）が最もよくその内容が明らかとなった例で，数回の建替により規模は変化するが，方形の区画内に建物が規画性をもって配置されている。発掘地区は正庁域と考えられ，長大な建物が検出されている。これに比較して小殿遺跡の建物は桁行総長が短いことから，中心的な建物でないことも考えられ，さらに西側の郡神社参道両側付近に中心があるものとも考えられる。また倉庫についても検出することができなかったが，調査範囲が狭いことから今後発見される可能性もある。

一般的に郡衙は，郡の中心的な郷に建てられており，その場合郡名と郷名が一致している場合が多いようである。第Ⅱ章で記した通り，歴史的環境からみて英賀郡の中心的な郷は水田郷であり，小殿遺跡は前述した点からその可能性が最も強いものである。

註

註１　橋本，井上，山磨，岡田「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』　4　1973年

第Ⅳ章　英　賀　廃　寺

第１節　寺院の名称と位置

A　寺院の名称について

上房郡北房町上水田に所在する英賀廃寺は，これまで英賀寺址，赤茂廃寺，英賀廃寺などと称されてきた。その名称について学史的に見るならば，昭和５年発刊の「岡山県通史」が最も古いもので，英賀寺址として報告されている。その論拠をここにすべて紹介できないが，要するに本寺院が単に水田一郷のものではなく，英賀郡の代表的伽藍であることから英賀寺とされたようである。

これに対し赤茂廃寺という名称は，明らかに文献などでその名称が判明しているもの以外は，歴史的な混同を避けるため，一般の遺跡同様原則として地名（字名）をかぶせて名称をつけたものであろう。これは昭和34年刊行の「古代吉備」において西川宏氏が，また昭和45年発刊の「古代の日本」において，間壁葭子氏も使用されている。

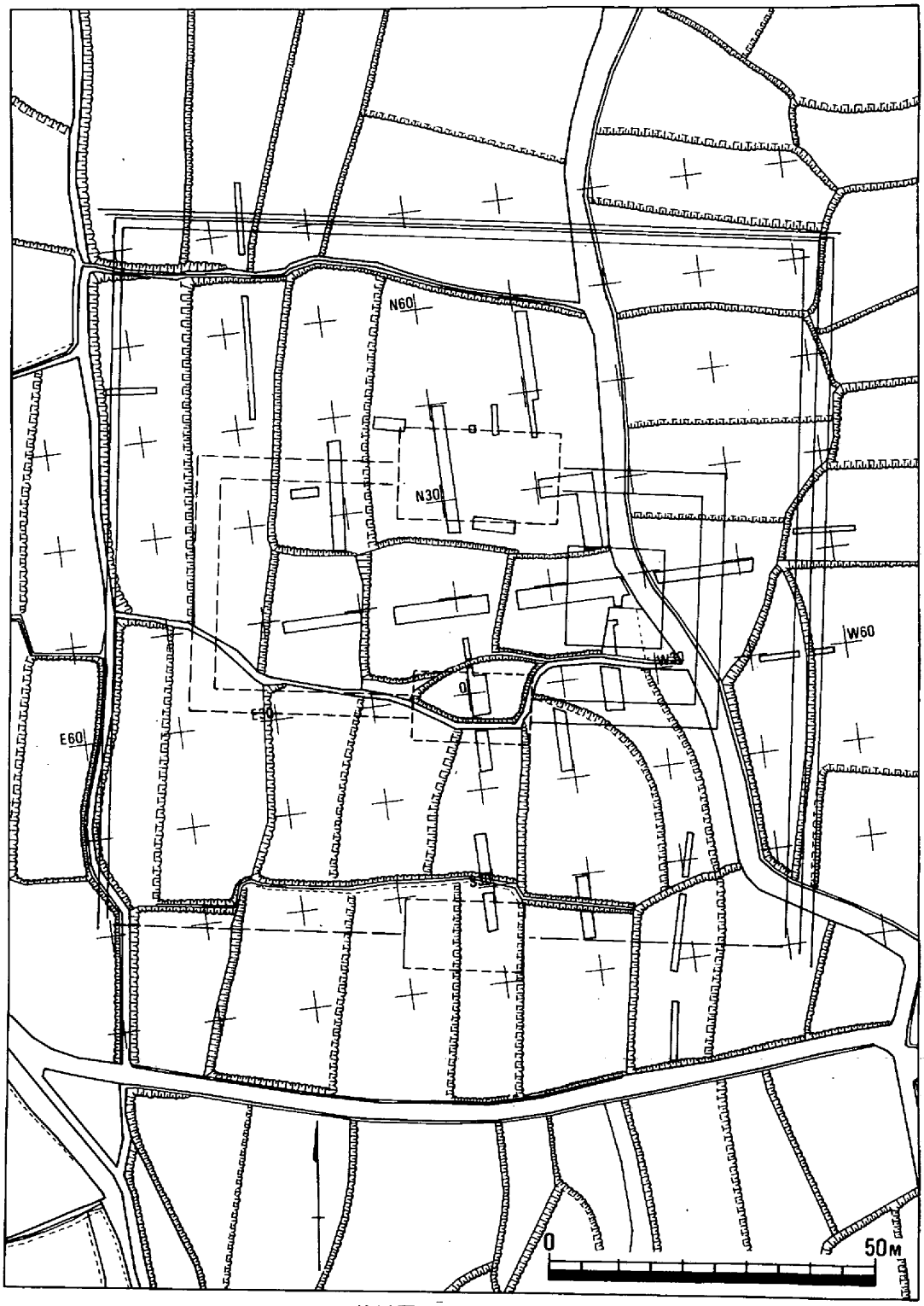
一方岡山県教育委員会発行の遺跡地図では英賀廃寺として記載されている。これは「岡山県通史」の名称を生かし，かつ現存しない寺院であることから英賀廃寺とし，県教育委員会も北房町教育委員会も使用してきた。

寺院の位置する行政区画は現在北房町上水田で，小字名は塔推定地が遠正，講堂推定地の北側が高倉，金堂推定地は観音堂となっている。しかし上水田が昭和28年に合併して北房町となるまでは，上水田村大字赤茂字高倉，遠正，観音堂に位置していた。したがって合併前は大字赤茂であったが現在は大字上水田となり，行政区画上は存在しない。しかし土地の人々は慣習で赤茂部落と言っており，赤茂の名称が生きていることも事実である。本報告書作成にあたり「名称の統一を」という研究者の提言もあり，名称の由来について記してみたが，それぞれに理由があり，どれが正しいとは言えないのが現状である。

現在では塔心礎のあった場所に「英賀廃寺」という標柱と説明板が立てられ，「英賀廃寺」として地域住民にも浸透している。したがって本報告書では「英賀廃寺」という名称を使用しておきたい。

B　寺院の位置と現状

英賀廃寺は上房郡北房町上水田の遠正，高倉，観音堂に所在する。英賀郡衙の北東約２㎞の低段丘上に位置し，背部には備中川によって形成された沖積地がひかえ，前面は低丘陵をはさみ吉備高原となる。廃寺の西側は谷が南に深く入り込んでいるが，この谷に沿って吉備高原へ登る古い道があり，備中国府（総社市金井戸に推定）より高梁，有漢を通り北房町野々倉からここに至ると考えられる。南側丘陵上には後期古墳が点在し，また北東約２㎞の備中平遺跡（北房町五名）では奈良時代の墨書土器が出土しており，本寺との関係が強く指摘されるものである。



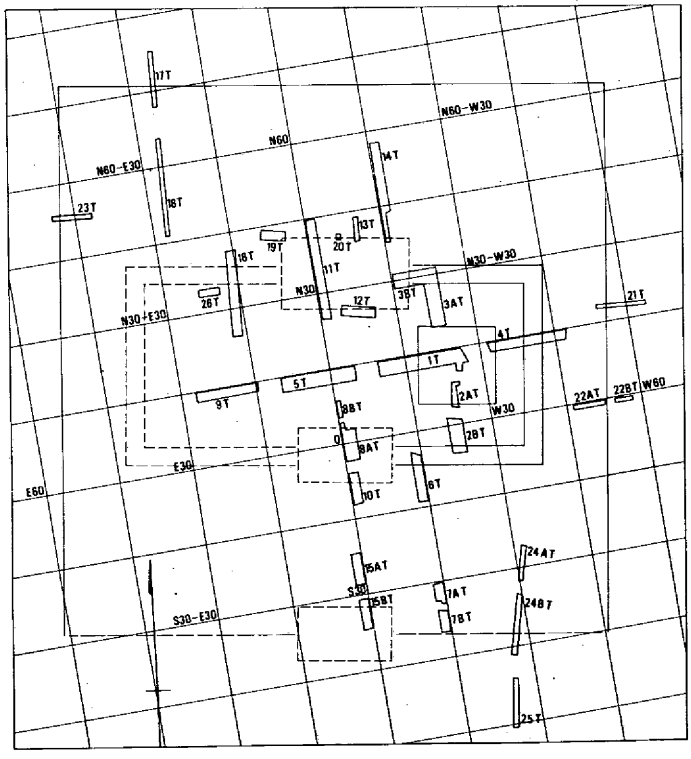
第11図　英賀廃寺地形図

寺院の位置する段丘は東が高く，北と西にむかって低くなってゆく。ここには弥生時代から中世にいたる遺跡が認められるが，その北端部，つまり備中川に接する場所を中国縦貫自動車道建設に伴い発掘調査している（谷尻遺跡）。その結果縄文時代より中世にいたる遺構・遺物が出土しており，大規模な複合遺跡であることが確認されている。このことから当然高い所にも遺跡がのびている可能性が強く，その一角に英賀廃寺が建立されている。またこの段丘上では広い範囲にわたり瓦が散布していることから，寺院以外に官衙遺跡の存在することも予想され，高倉，城ノ内，大門，的場などという小字名がその可能性を一層強くしている。

第２節　調査の方法と調査経過

英賀廃寺は水田の畦などからほぼ一町四方が推定されることから，中門推定地を起点として，推定寺域をカバーできる範囲に磁北で１辺15mのグリッドを設定した。そして起点より東西南北の基準杭に図のような番号を付した。したがって位置を標示する場合には先に北と南のラインを表わし，その後に西と東のラインを記すこととした。つまりＮ15－Ｗ15の標示は北へ15mのラインで，東へ15mの所ということを表わしている。トレンチの設定はおおむねこのグリッドによったが，地形，畦などに合わせた所もある。また幅についても，推定される遺構や水田の状況に応じて決定していることから，統一されてはいない。寺域内は塔推定地の一部が荒地であるほかはすべて水田であるが，牧草を植えていたり，藺草を植えていて調査できない場所もある。

調査は11月19日より開始され，まず塔推定地より行った。すでに塔心礎は抜き取られているが，所在した場所は判明しており，そこには石碑が立っている。このためそこを掘ることが出来なかったが，１Ｔの東端で南側を一部拡張した所で礎石抜き取り穴の端を確認した。塔基壇の確認は１～４Ｔで行い，１Ｔと４Ｔで西と東の端を確認したが，



第12図　トレンチ設定図

2，3Tではちょうど畦の下になり検出できなかった。また3，4Tでは回廊の一部が検出されたことから，塔，金堂を囲む回廊が想定された。

次に金堂推定地の調査を行ったが，耕作土直下は黒色土（弥生式土器包含層）となり，遺構は検出できなかった。このことから金堂はすでに削平されている可能性が強いものと考えられた。

中門推定地は8Tと10Tで確認を行ったが，8ATで地業と考えられる版築状の土層が認められた。しかし10Tでは耕作土直下は黒色土となり，黄褐色を呈する地山面でも遺構は検出されなかった。

講堂推定地は7カ所のトレンチを設定した。ここは耕作土直下で地山，あるいは残存した遺構が検出される所であり，僅かに残った基壇の一部と北側の雨落溝を確認した。礎石掘方は一部しか検出されなかったが，柱間360cmの4間×7間の建物が想定される。

南門推定地も耕作土直下は黒色土となり，瓦も全く認められないことからすでに削平されている可能性が強いが，南側の寺域が一町より広いことも考えられることから24・25Tを設定したが何も検出できなかった。

寺域については西を23Tで，北を17Tで，東を21Tでそれぞれ確認した結果，明瞭ではないが，溝と築地状の遺構が確認できた。しかし南限については何の痕跡も認めることができなかった。

以上のことから英賀廃寺は塔を東に，西に金堂を配し，中間より塔・金堂を囲む回廊が講堂に取り付く伽藍が想定された。これは従来確認されている寺院の伽藍配置で言えば，法起寺式，あるいは観世音寺式が想起される。

なお調査において，寺院関係以外の遺構も検出されているが，原則として掘り下げることはしなかった。ただ中世の遺構については，寺院の遺構を検出するため掘り下げた所もある。

調査は秋から真冬にかけておこなわれたことから北国特有の天気で，冬は雪が断続的に降り，霜柱や凍結に悩まされながら，実質48日間を費やし2月8日に終了した。

日誌抄

1979 年11月19日　発掘調査開始。柳瀬昭彦の応援を得て杭打を行う。

20日　道具類を搬入する。1Tを設定し表土剝ぎを行う。

21日　1T瓦溜り清掃後写真。2AT，2BTを設定し表土剝ぎを行う。

22日　1T中世柱穴郡の平面実測。2AT，2BT掘り下げ。

26日　専門委員会開催。2BT掘り下げ。3Tを設定し表土剝ぎを行う。

27日　3T遺構検出。4Tを設定し表土剝ぎを行う。

28日　1T瓦溜り取り上げ。4T表土剝ぎ。

29日　1T瓦溜り取り上げ。4T表土剝ぎ。

30日　1T瓦溜り取り上げ。4T瓦溜り検出。

12月3日　1T瓦溜りの下を掘り下げ。下層に瓦溜りが確認される。

4日　1T下層瓦溜り掘り下げ。4T瓦溜り検出後写真。

5日　1T下層瓦溜り掘り下げ。4T瓦溜り取り上げ。

6日　1T遺構検出後写真。4T掘り下げ。5Tを設定し表土剝ぎを行う。

7日　5T表土剝ぎ完了し，さらに掘り下げを行う。4T掘り下げ。3T遺構検出。

10日　3T遺構検出。4T掘り下げ。5T掘り下げ。

11日　5T掘り下げ。4T遺構検出。

12日　5T掘り下げ。4T遺構検出完了し，清掃後写真。1T実測。

13日　文化庁の稲田技官来訪。5T掘り下げ。2BT掘り下げ。

14日　1T実測。5T瓦溜り掘り下げ。2BT掘り下げ。6Tを設定し表土剝ぎを行う。

17日　1T実測。2BT掘り下げ。7A・7BTを設定し表土剝ぎを行う。

18日　1T実測。7A・7BT掘り下げ完了。2BT掘り下げ。6Tを設定し表土剝ぎ後掘り下げ。
8Tを設定し表土剝ぎを行う。

19日　6T遺構検出。2BT掘り下げ。8T表土剝ぎ。9Tを設定し表土剝ぎを行う。

20日　2BT掘り下げ。6T清掃後写真。8T掘り下げ。9T表土剝ぎ。3T実測。

21日　9T掘り下げ。8AT掘り下げ。10Tを設定し表土剝ぎを行う。

24日　9T掘り下げ。8AT掘り下げ。10T掘り下げ。4T清掃後写真。

25日　9T掘り下げ。10T遺構検出後写真。8AT掘り下げ。4T実測。

26日　4T実測。11Tを設定し表土剝ぎを行う。

1980年1月7日　11T遺構検出。8AT掘り下げ完了。22Tを設定し表土剝ぎを行う。

8日　15Tを設定し表土剝ぎを行う。11T遺構検出後写真。12T，13Tを設定し表土剝ぎを行う。

9日　12T，13T遺構検出。14Tを設定し剝ぎ後遺構検出を行う。17T，18Tを設定し表土剝ぎ。

10日　14T遺構検出後写真。17T，18T遺構検出後写真。16Tを設定し表土剝ぎ。

11日　19T，23Tを設定し表土剝ぎ。16T遺構検出後写真。26Tを設定し表土剝ぎ。

14日　26T遺構検出後写真。23T掘り下げ。24Tを設定し表土剝ぎ。専門委員会を開催。

16日　24T遺構検出後写真。25Tを設定し表土剝ぎ。23T掘り下げ。

17日　23T掘り下げ。25T遺構検出後写真。12T・14T実測。

19日　見学会。

21日　9T実測。5T実測。16T，17T，18T実測。15T埋め戻し完了。9T埋め戻し。

22日　9T埋め戻し。16T，17T，18T埋め戻し完了。2T実測。10T実測。

23日　23T実測。3T実測。5T，11T埋め戻し完了。2T実測。10T実測。

24日　8T，15T，24T，25T実測。2T埋め戻し完了。1T埋め戻し完了。

25日　19T，21T，22T，7T実測。9T埋め戻し。

28日　20T，13T実測。9T埋め戻し完了。

29日～2月2日　埋め戻し。

2月4日～5日　埋め戻し。

2月6日　出土瓦片430袋を北房町教育委員会で保管するため運搬。

2月7日　道具等の整理。

2月8日　調査終了。道具類を搬出。

第3節　調　査　の　概　要

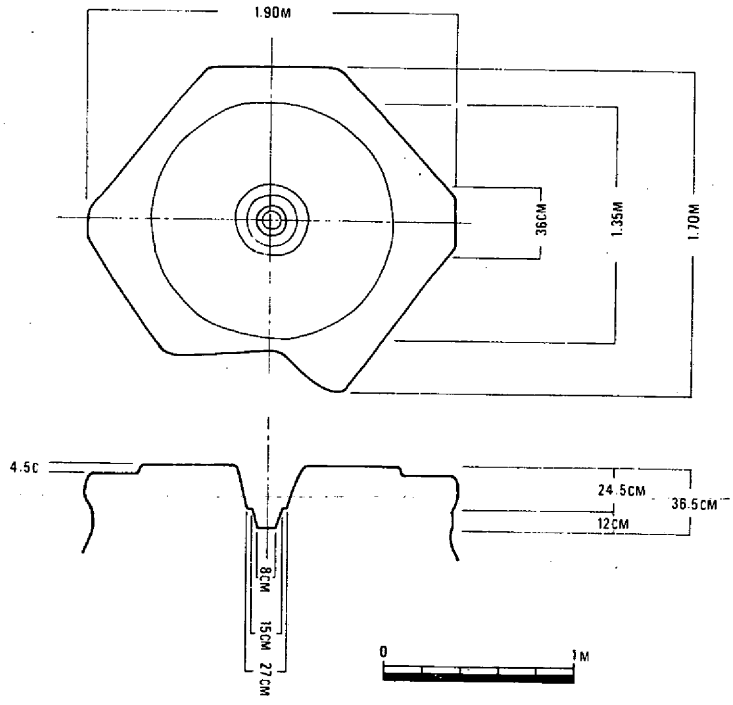
I　寺院関係の遺構と遺物

A　遺　　構

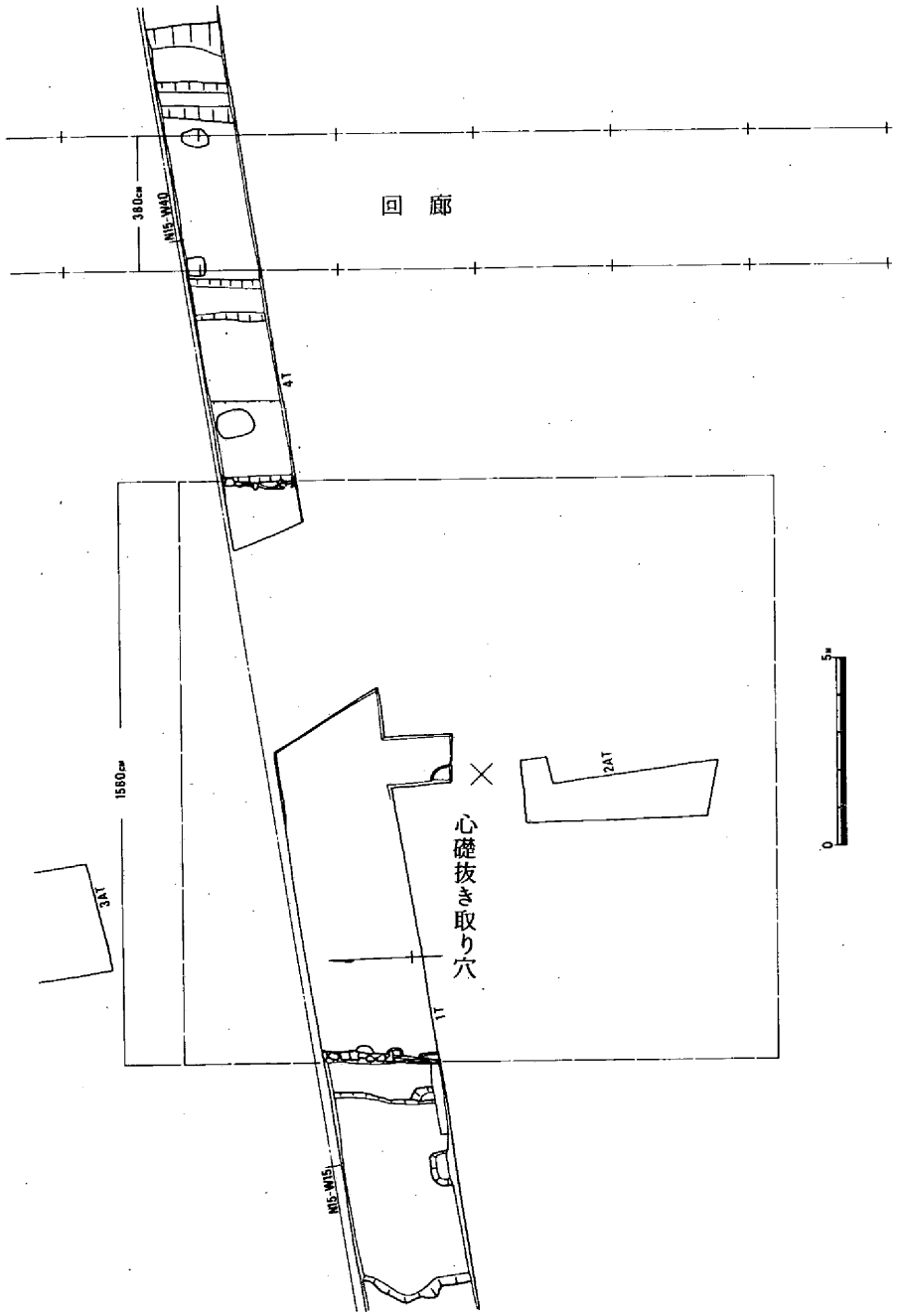
塔　（第13～15図）

塔の調査は1～4のトレンチで行った。すでに塔心礎は昭和13年に持ちさられているが（註1），抜き取った位置が明確であることから，塔の位置だけは知られていた。この心礎の位置した場所には現在石碑が建てられており，周囲は水田より約60cmほど高くなっている。このため一部は塔基壇が残存する可能性も考えられた。しかし1Tの東端や2ATで見る限り，周辺の水田より出土した瓦やゴミを集めているものであることが判明した。1Tは耕作土直下から基壇が検出され，西側では瓦溜りが確認された。この面で中世の柱穴も多く確認できた。瓦溜りは間層を挾み上下二層に分れ，上層では東に多く，下層では西に多いことが指摘できる。基壇化粧は乱石積でその下端より整地が行われ，その上に瓦が多量に堆積している。この中からは第2・3類が多く出土した。基壇端より西へ一段高い場所があり，その西側は溝状を呈している。さらに西端は黄褐色地山土を含む褐色土により一段高くなっている。この溝状の中は西側に多くの瓦が認められ，また，類の瓦が出土した。

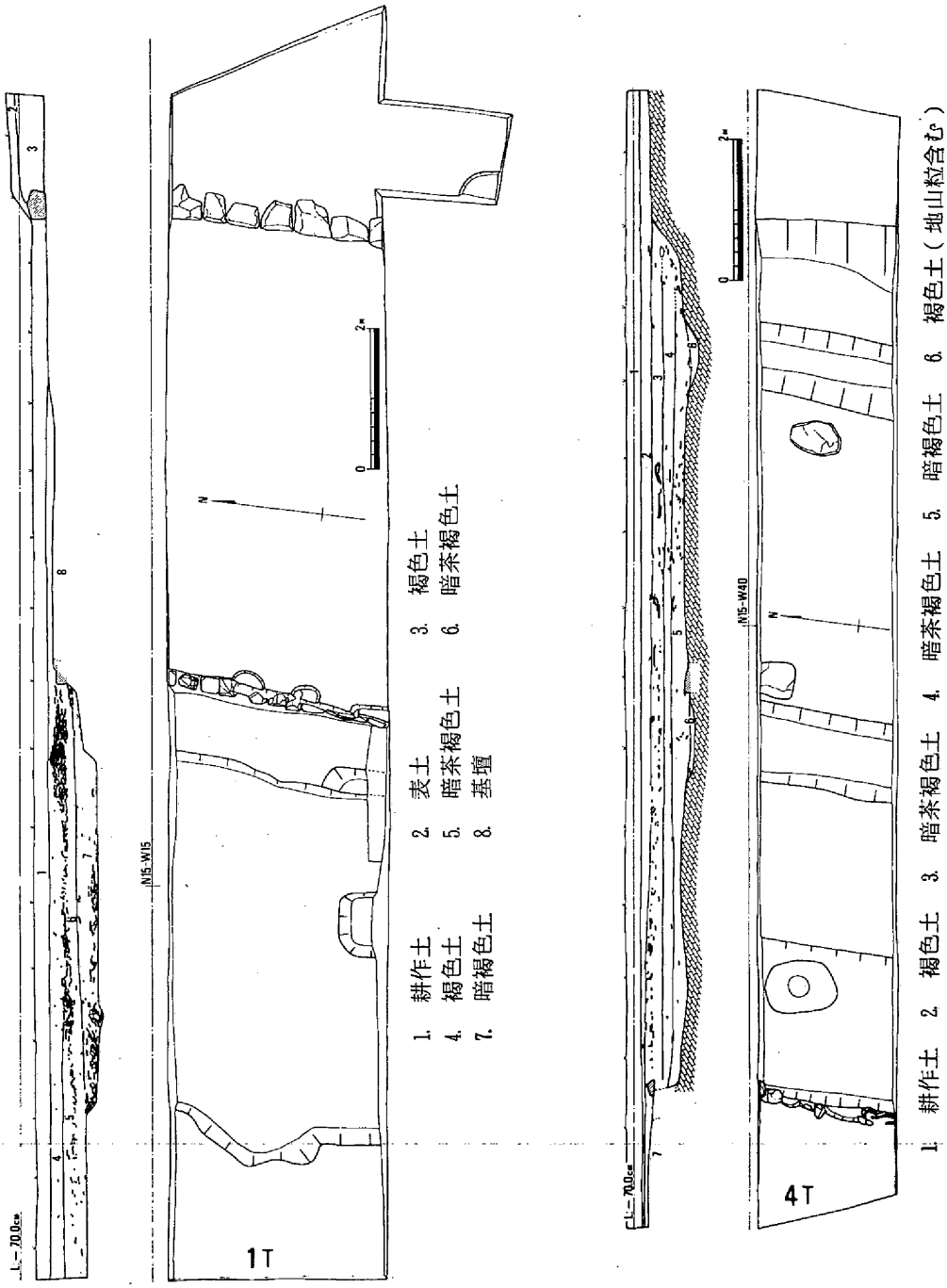
4Tでは塔の東基壇が確認され，さらに東側では回廊が検出された。この結果塔の基壇は一辺が15m60cmとなることが判明した。1Tの一部を南に拡張した所，その南端に心礎抜き取り穴と考えられる土壙を検出した。心礎は約2mあることから位置は良いものと考えられる。24Tあるいは，3ATで北側と南側を確認し



第13図　塔心礎略測図



第14図 塔 平 面 図

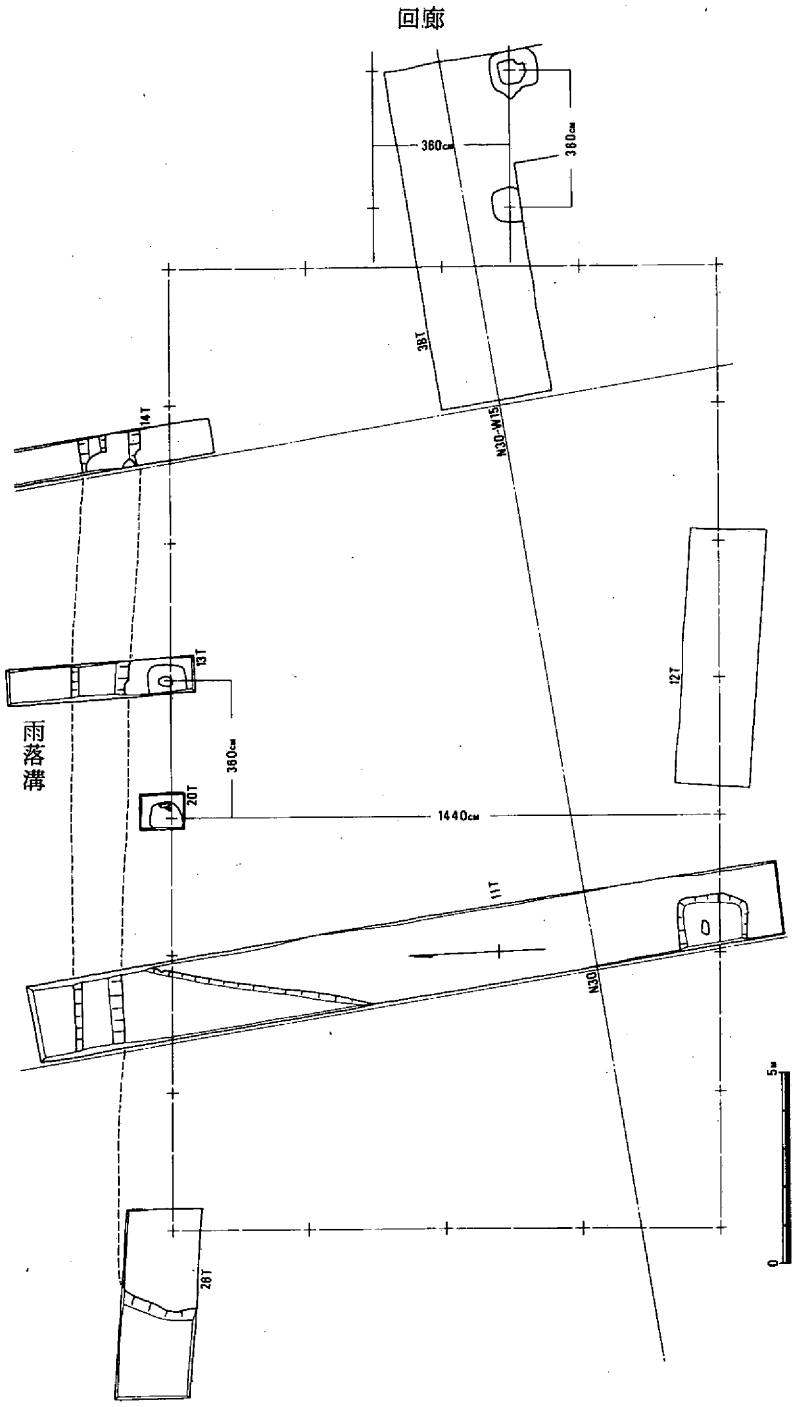


第15図　1T・4T実測図

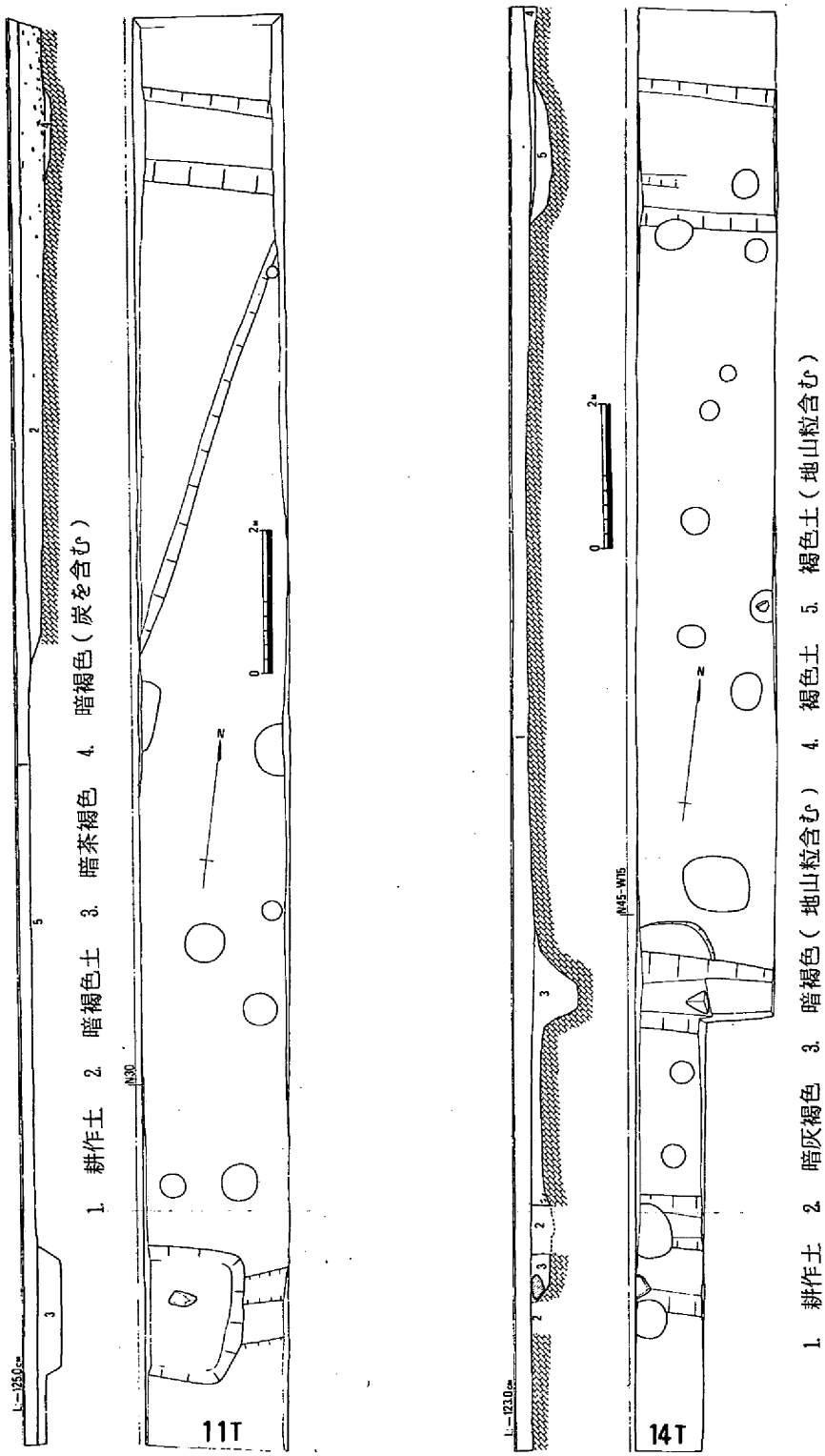
ようと考えたが，2ＡＴの南側は道と畦があり，2ＢＴでは検出できなかったことから，その間に南端があるものと思われる。北側も畦の下と考えられ，3ＡＴでは検出できなかった。塔基壇は4Ｔで見る限りでは当時の生活面を掘り下げて，その上に地山土と地山土と細礫を含む褐色土を互層に積んでいることから，掘り込み地業が行われたものと考えられる。また雨落溝内で方形の掘方が検出されているが，どのような建物を構成するのかは不明である。

講堂　（第16～18図）

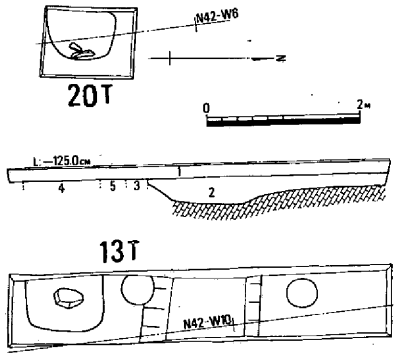
講堂と推定した建物は塔より北側の寺域中軸線上に位置するものである。ここはすべて耕作土直下より遺構が検出される。14Tは南端で建物の雨落溝が確認でき，この溝は13Tと11Tの北端でも確認



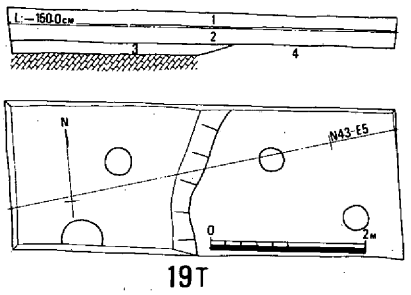
第16図　講堂平面図



第17図　11T・14T実測図



1. 耕作土　2. 褐色土
3. 褐色土（地山粒含む）　4. 黄褐色土



1. 耕作土　2. 褐色土（地山粒含む）
3. 灰褐色　4. 暗褐色　5. 黄褐色土

第18図　19T・13T・20T実測図

され，溝内からは瓦も多く出土した。11Tで見ると基壇が20cm程度残存する所もあるが，ほとんど削平されているようであった。掘方が13Tと20T，そして11Tの南端で確認でき，これらの柱間は360cmであることが判明した。3BT，12T，26Tでは掘方は確認されなかったことから，すでに削平されたものと考えられた。26Tでは南北に地山が削られているが，これが，講堂基壇の西端となるのかどうかは断定できない。

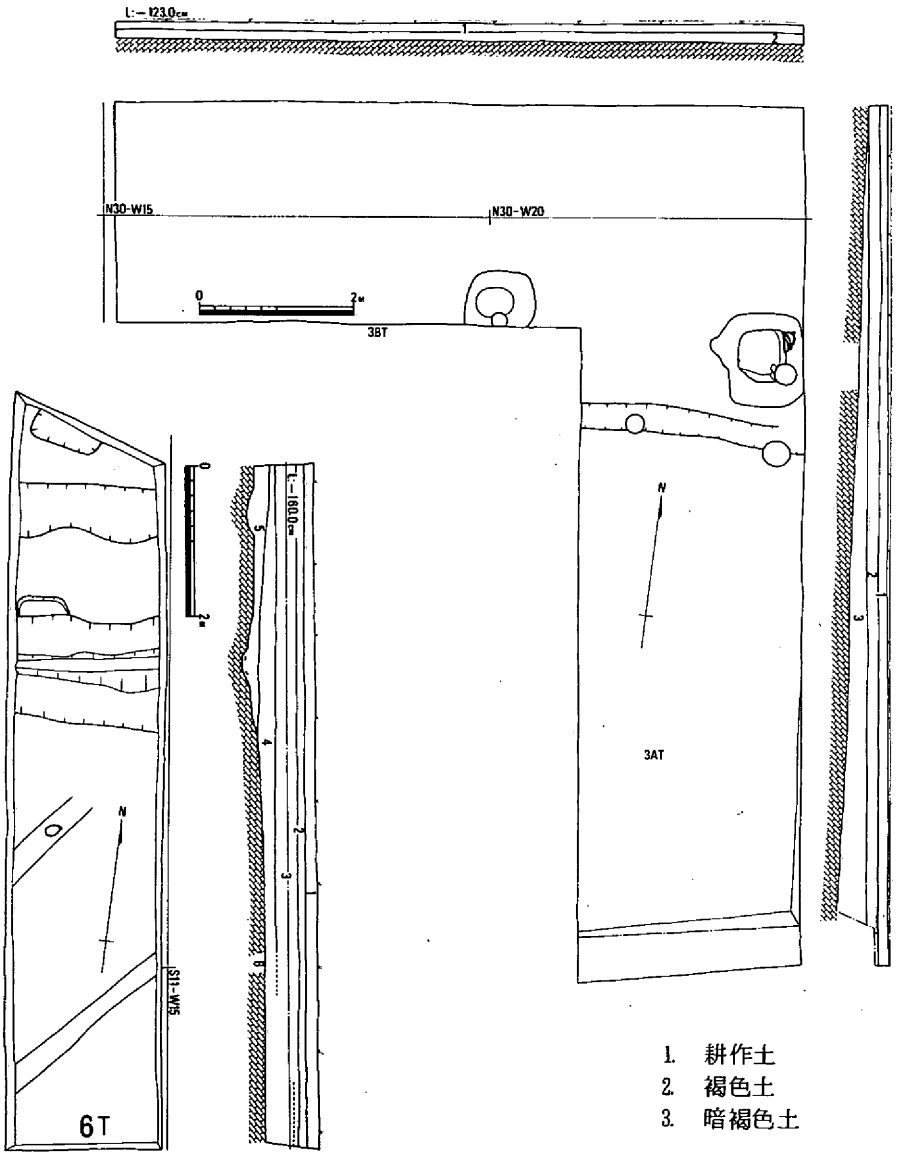
金堂

塔の西側に観音堂という小字名が残っており，また東に塔が位置することから，西に金堂が想定された。ここは塔より約2m低く，すでに削平された可能性の強い所であった。一応9Tを設定し確認したが，耕作土直下は厚い黒土層（弥生式土器包含層）となり，基壇はもちろん，寺院関係の遺構は検出されなかった。16Tは金堂北端の確認のため設定したが，北側は表土直下は地山となり，南に行くにしたがい地山が下り黒色土が厚くなる。このトレンチでも寺院関係の遺構は検出されなかったが，黒色土層に掘り込んだ，方形の掘立柱掘方を検出した。時期は不明であるが，掘方の一辺が60～70cmで，柱間は360cmを測る。主軸の方位は寺院と一致することから寺院関係の遺構の可能性も考えられる。

中門

中門に推定される水田は，他の水田がすべて長方形あるいは方形で，畦も南北，東西に通っているのに対し，南に張出し変形したものとなっている。地権者の話によれば，水田にする前は約1m程度高く荒地であったそうである。8ATでは耕作土直下は小礫を含む黄褐色土で，以下同じ土であるが互層に積まれた状態が確認された。10Tは南側の一段低い水田に設定したが，耕作土直下は黒色土となり，遺構は検出されなかった。

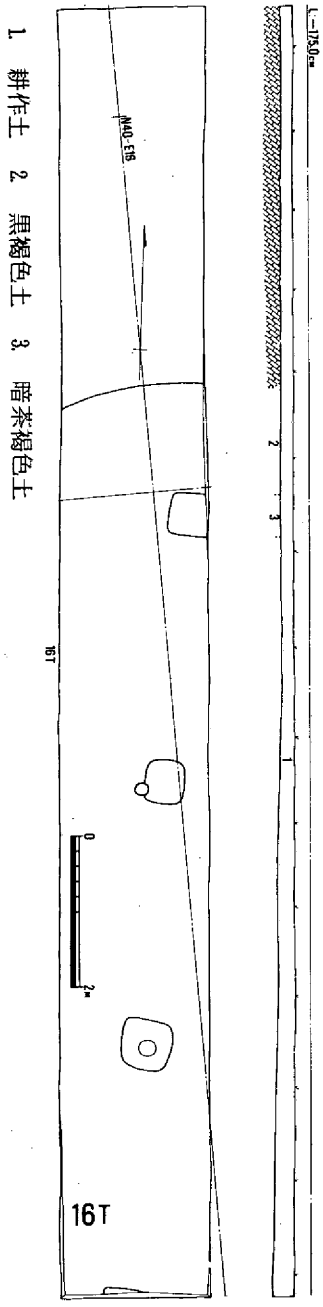
南門

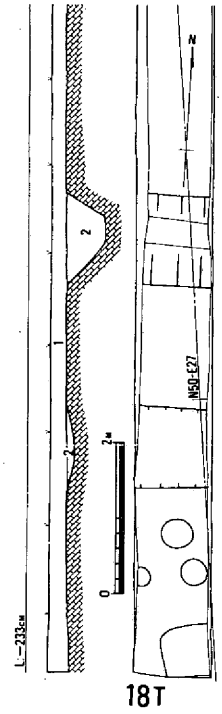


1. 耕作土
2. 褐色土
3. 暗褐色土

1. 耕作土
2. 褐色土
3. 黒褐色土
4. 暗褐色土
5. 暗黄褐色土

第19図　3Ｔ・6Ｔ実測図





1. 耕作土
2. 褐色土

第20図　16T・18T実測図

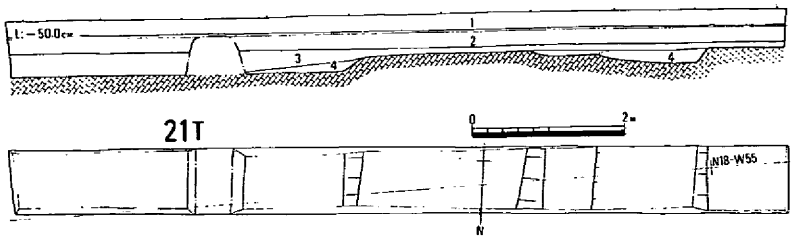
方1町と考え，南門推定地にトレンチを設定したが，耕作土直下は黒色土となり，また瓦片が数片出土したのみであった。この周辺のトレンチでも瓦は全くと言ってよいほど出土せず，かなりの削平を受けたことが考えられる。

回廊　（第19図）

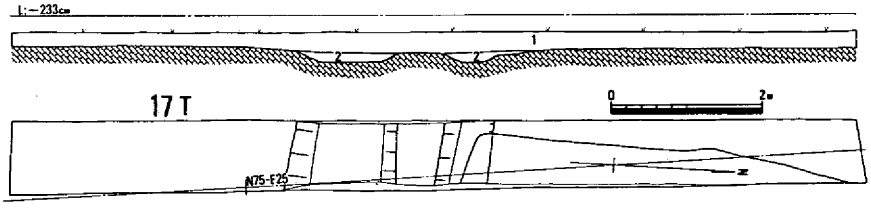
回廊は塔を囲むように，6T，4T，3ATで確認できた。6Tは北端で回廊南側の雨落溝が検出された。4Tでは雨落溝と礎石が検出された。ここは地山を削り込んで作られていることから塔より高くならないよう配慮されたものと考えられる。回廊の柱間は360 *cm* を測る。3AT，3BTでも回廊の南側が検出され，僅かに雨落構も残存していた。

寺域　（第21図）

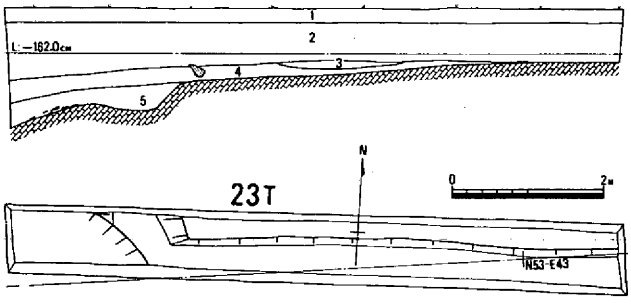
寺域については東端の畦が南北に通り，西端も畦が通っており，その幅が108 *m* を測ることから，方1町の寺域を想定し，23T，17T，21T，22Tで確認を行った。　Tでは溝と築地状の高まりが検出され，これが北端を示すものと考えられた。21Tに



1. 耕作土　3. 暗褐色
2. 褐色土　4. 暗茶褐色土

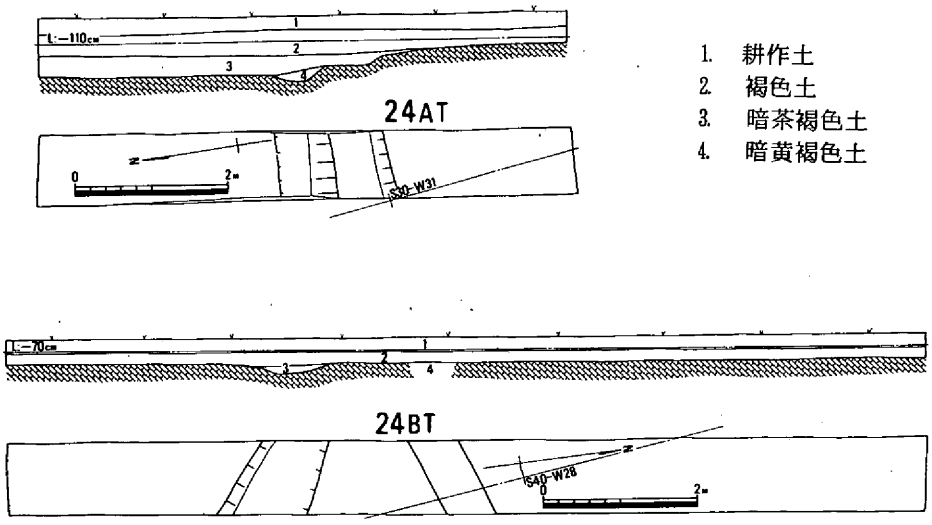


1. 耕作土　2. 褐色土（地山粒含む）



1. 耕作土
2. 褐色土
3. 褐色土（炭を含む）
4. 暗褐色土
5. 暗黄褐色土

第21図　21T・17T・23T実測図



第22図　24ＡＴ・24ＢＴ実測図

おいても溝と築地状の遺構が検出され，ほぼ現在の畦と同じことが確認できた。23Tでは僅かに溝状となる遺溝が検出され，これを西端とした。このトレンチの南側掘込み内より瓦が多量に出土した。

建物（第20図）

中心伽藍の北側には僧房や各種の雑舎が想定される。14Tでは北と南に雨落溝が検出され，南側雨落溝の内側で柱掘方が検出できたことから，東西棟の建物が想定された。18Tにおいても雨落溝が検出され，南端では柱掘方が認められることからやはり建物が想定できた。しかしこれらの建物の性格については明確にし得ないが，講堂北側の東西棟の建物は僧房の可能性が強い。

16Tでは明確に寺院に伴うかどうか不明であるが，寺院と方位を同じくする方形の柱掘方が検出された。柱掘方は一辺が約50〜60cmで柱間寸法は360cmを測る。4間分を検出したが，北端の掘方は西側回廊推定線上にあたることから，回廊の一部とも考えられるが，他の回廊が礎石を有するのに対し，ここでは掘立柱であることから，別の建物の可能性が強いものである。

以上寺院関係の遺構について概述したが，トレンチ調査であり，しかも遺構の残存状態も良好でないことから，主要伽藍の規模・配置等については不明確な点が多いが，塔，講堂，回廊を確認した。また中門については地業の痕跡からその位置が想定された。これらの配置は，東に塔が位置し，これを囲むように東西に長い回廊が中門から講堂に取り付くと考えられた。寺域については西と北と東側で確認できたが，南については何ら痕跡を認めることができなかった。しかし主要伽藍を中心に想定すると方一町の可能性が強い。

B 遺　　物

遺物は多量の瓦を中心に，弥生式土器，須恵器，土師器，緑釉，鉄釘が出土した。瓦は肥料袋440袋もの量になったが，この大部分は塔の瓦溜りのものである。この内軒丸瓦，軒平瓦類はポリコンテナ5箱である。瓦以外の遺物は僅かで，ポリコンテナ2箱であった。

a 瓦

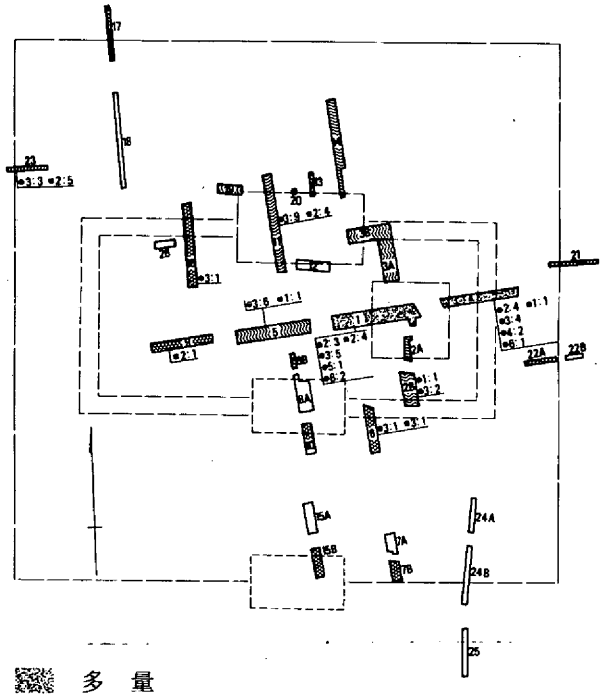
各トレンチにおける瓦の出土量は第23図に示す通りである。この図で明らかなように，塔の瓦溜りが最も多量に出土しており，次に講堂周辺が多かった。その他のトレンチでは僅かであり，特に南門推定地周辺では数片しか出土していない。また金堂が推定される場所（9T）においても僅か数片であり，遺構の残存状態と比例しているようである。

軒丸瓦（第24図）

1類（第24図1）　重弁8弁蓮花文軒丸瓦で，2BTより出土した。外区に線鋸歯文と連珠文をめぐらし，花弁はやや肉厚で花弁端はやや反り返っている。中房は僅かに高くなり，1＋8の蓮子が付く。須恵質で暗青灰色を呈する。推定直径は15cmを測る。

2類（第24図2）　外区を鋸歯文と連珠文がめぐる重弁8弁蓮花文軒丸瓦である。中房は僅かに高くなっており，1＋4の蓮子が付く。花弁は1類より退化し，凸線で表わされており，子葉も凸線となる。間弁は根元からラッパ状に分れた特異な形状を呈している。胎土に砂粒を多く含み淡灰色を呈する。推定直径は17cmを測る。

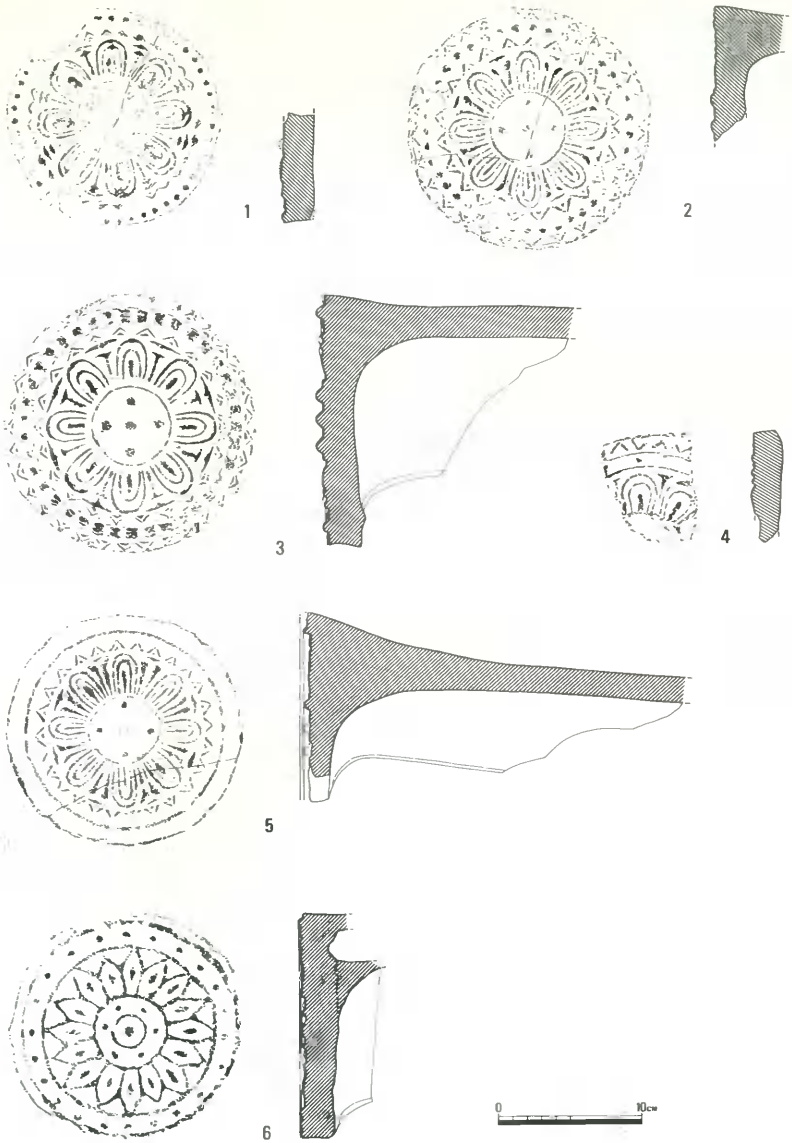
3類（第24図3）　今回の調査で最も多く出土したもので，外区に鋸歯文と連珠文をめぐらす重弁8弁蓮花文軒丸瓦である。直径17.5cmを測る。文様の構成は基本的には2類に類似するが，外区の連珠文が帯状凸帯の上に付くことと，内区の間弁が細長く中房に達する楔形を呈していることが相違している。胎土に砂粒を多く含むものもあり，2類に比較



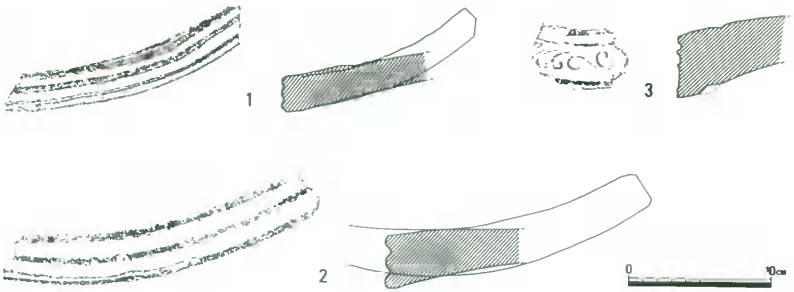
多　量
普　通
少　量
無　し

● 軒丸瓦
■ 軒平瓦
例（●軒丸瓦2類：3個体）

第23図　瓦の出土量



第24図　軒　丸　瓦



第25図　軒　平　瓦

してやや粗雑さが認められる。青灰色を呈し，須恵質である。

4類（第24図4）　重弁蓮花文軒丸瓦で，4Tより2片出土したのみである。外区の周縁は鋸歯文がめぐり，その内側を圏線，珠文，圏線がめぐる。内区は3類に類似すると考えられるが，3類の花弁が細長いのに比べ，やや幅広く丸みをもっている。暗青灰色を呈する。

5類（第24図5）　外区に圏文と鋸歯文をめぐらす重弁8弁蓮花文軒丸瓦で，1Tより1個体のみ出土している。推定直径は16.4 cmを測る。外区にはこれまでの鋸歯文，連珠文に代って2重の圏文となり，その内側に鋸歯文がめぐる。内区は2類と同じものである。瓦当と丸瓦の接合部には補足粘土が多く使われており，上面に反りが認められる。やや軟質で灰白色を呈する。

6類（第24図6）　1Tの下層瓦溜りも4Tより僅かに出土したもので，単弁16弁蓮花文軒丸瓦である。直径は16cmを測る。外区周縁には二重の圏分を，その内側に珠文，圏文をめぐらしている。内区は凸線で矢の尖がった花弁を16弁配し，中房は凸線で区画され，1＋6の蓮子が付くが，中央の蓮子を凸線が囲んでいる。胎土には砂粒を含まず，瓦質で軟弱である。色調は灰褐色を呈する。

軒平瓦（第25図）

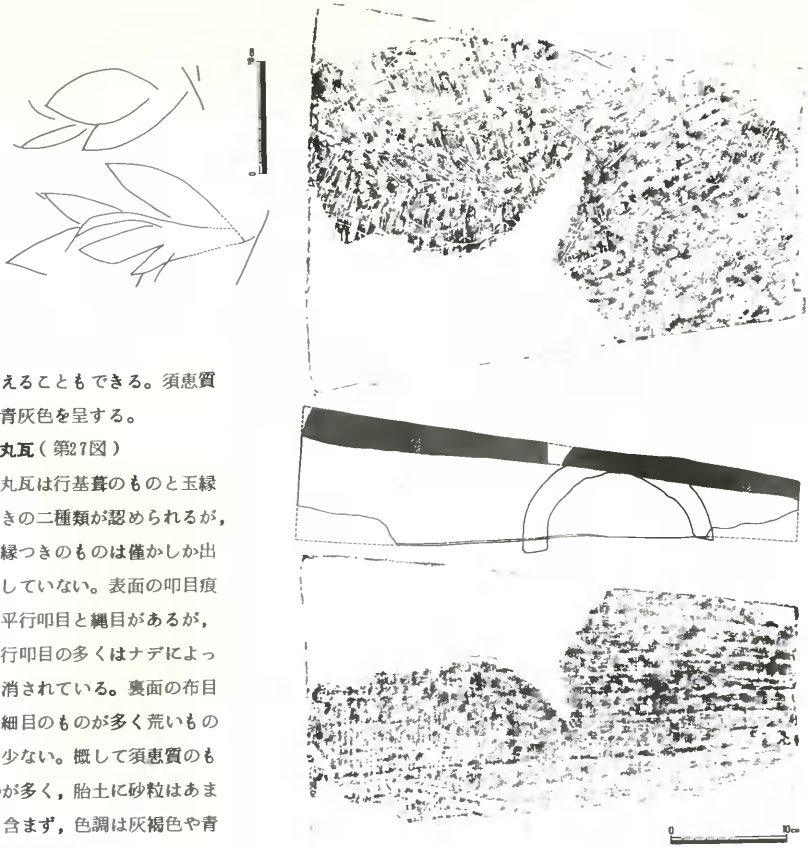
1類（第25図1）　無顎の重弧文軒平瓦で，4Tと5Tより出土した。重弧文は2条の沈線によって表わされている。瓦当の両端はヘラ削りにより三角形を呈している。須恵質で青灰色を呈する。

2類（第25図2）　無顎の重弧文軒平瓦である。無顎であるが，瓦当部はやや厚みを増し，横ナデにより仕上げた凹線で重弧文が描かれている。瓦当両端は三角形を呈するものも認められるが，大部分は平坦である。須恵質で色調は淡青灰色を呈する。

3類（第25図3）　無顎の唐草文軒平瓦で，6Tより小破片が1片出土した。小破片のため全体の文様構成は明らかでない。瓦質で暗青灰色を呈する。

線刻文様瓦（第26図）

丸瓦の表面に線刻文様が描かれているもので，1Tの瓦溜りより出土した。文様は線刻が細いため明瞭でないが，草，あるいは木の葉を表現しているようであるが，対葉形宝相華文を模倣したものと



第26図　線刻文様瓦

考えることもできる。須恵質で青灰色を呈する。

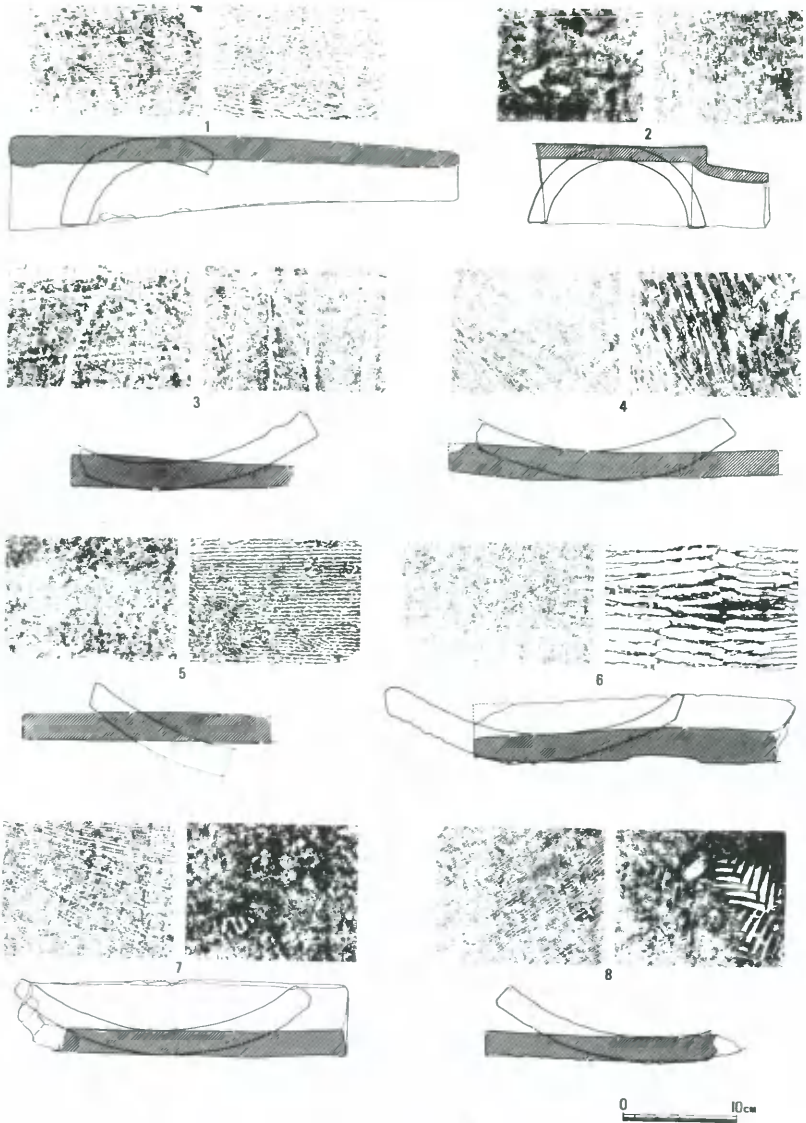
丸瓦（第27図）

丸瓦は行基葺のものと玉縁つきの二種類が認められるが，玉縁つきのものは僅かしか出土していない。表面の叩目痕は平行叩目と縄目があるが，平行叩目の多くはナデによって消されている。裏面の布目は細目のものが多く荒いものは少ない。概して須恵質のものが多く，胎土に砂粒はあまり含まず，色調は灰褐色や青灰色を呈する。これに対し瓦質のものは砂粒を多く含み，灰色，灰白色，茶褐色などを呈する。

1は行基葺の丸瓦で，長さ39cm，幅は推定で16cmを測る。表面には縄目が，裏面は布目が認められる。胎土に砂粒を多く含み，瓦質で淡茶褐色を呈する。

2は玉縁つきの丸瓦で，幅は16cmを測る。表面はナデて叩目痕を消しており，裏面には細かな布目が認められる。胎土に砂粒を少量含み，須恵質で灰褐色を呈する。

平瓦（第27図）



第27図　丸瓦・平瓦

平瓦も丸瓦同様，須恵質のものと瓦質のものとが認められるが，須恵質のものが多い。表面の布目は細かなものが多い。裏面は平行叩目，「く」の字状の叩目，縄目などがあるが，須恵質で平行，あるいは「く」の字状の叩目をもつものはナデなどにより消されるものが多い。

3の表面には長辺の端に近い所に縦に沈線を1本施し，そこから横に4本の沈線が描いている。裏面には荒い布目が認められる。胎土に砂粒を多く含み，瓦質で赤褐色を呈する。

4は表面に桶の板目が認められる。裏面は荒い平行の叩目をクシ状の工具でナデている。胎土に砂粒をあまり含まず，須恵質で灰褐色を呈する。

5は表面に荒い布目が残り，裏面には整然とした縄目が認められる。砂粒を多く含み，瓦質で灰白色を呈する。

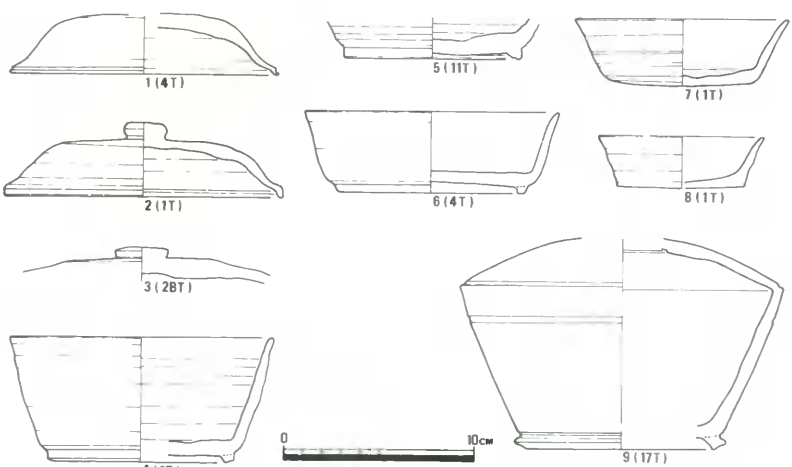
6は幅27cmを測り，両端はヘラ削りが認められる。表面には布目が，裏面には荒い平行叩目が残る。胎土に砂粒を多く含み，瓦質で赤褐色を呈する。

7は幅26cmを測り，表面には荒い布目，裏面には細かな平行叩を施しナデている。胎土に砂粒を多く含み，瓦質で灰褐色を呈する。

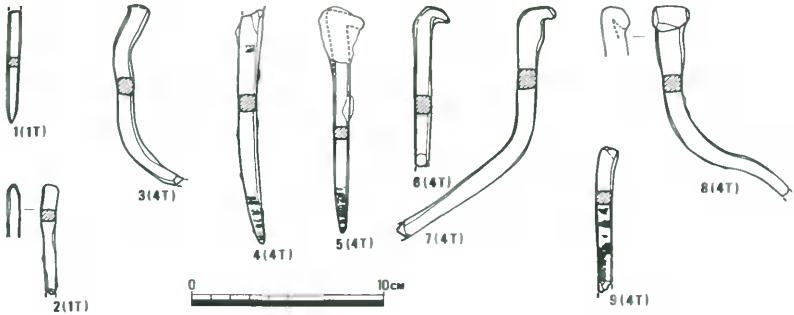
8は表面にやや荒い布目が，裏面には「く」の字状の叩目が残る。胎土に砂粒を少量含み，須恵質で茶褐色を呈する。

b　須恵器（第28図）

1は杯蓋で，4Tの回廊西側で出土した。2と同様のつまみが付くと考えられ，やや平坦な天井部から急斜で口縁部に至る深い形態を呈している。口縁端部は，端面の強い横ナデによって外方へ突き



第28図　須　恵　器



第29図　鉄　　釘

出している。色調は青灰色を呈する。

2は1Tの下層瓦溜りより出土したもので，杯蓋である。調整は内外面とも横ナデが施されている。色調は淡青灰色を呈する。

3は扁平なつまみが付く杯蓋で，2BTより出土したものである。色調は灰白色を呈する。

4は杯身で，1Tの瓦溜りより出土した。口径13.8 cm，器高6.6cmを測る。高台は短く，端面が外傾したものが，底部外端に貼付けられている。口縁部は開きぎみに真直ぐ立上がっている。内外面とも横ナデにより丁寧に仕上げられている。色調は暗青灰色を呈する。

5は11Tより出土したもので，杯身の底部である。高台は短く，端面は内傾している。底部はヘラ切り後をナデており，内面は荒い仕上げナデを施している。色調は淡青灰色を呈する。

6は杯身で，4Tより出土した。高台は短く，真直下がっている。口縁部はやや開きぎみに立上り，端部近くでやや強く外反する。口縁部内外面は横ナデ，底部はヘラ切り後丁寧なナデを，内面は仕上げナデにより調整している。色調は淡灰色を呈する。口径13.2 cm，器高4.3cmを測る。

7は杯身で，1Tの瓦溜りより出土した。推定で口径11cm，器高3.5cmを測る。多少丸みをもつ底部から外反する口縁部となるもので，端部は丸くおさめる。色調は淡灰色を呈する。

8は小型の杯身で，1Tより出土した。底部はヘラ切りのままで，口縁部は内外面とも横ナデにより調整している。色調は灰褐色を呈する。

9は壷で，17Tの溝より出土した。細長い口縁部が付くと考えられ，肩と胴部に沈線がめぐる。底部には強く外方にふんばった高台が付き，その端面は横ナデによる凹部をもち外傾している。調整は内外面とも横ナデによって丁寧に仕上げられる。色調は青灰色を呈する。

c　鉄釘（第29図）

鉄釘は1Tと4Tから出土した。1T出土のものはすべて下層の瓦溜りより出土したもので，完形品はないが小型のものと考えられる。4T出土のものは7が瓦溜りより出土し，その他はすべて回廊

で出土した。7・8のような大型のものと，その他の小型のものとが認められる。完形でないものもあるが，頭部は逆L字状に曲げられているものと考えられる。4・5・9は横方向の木質が残存している。

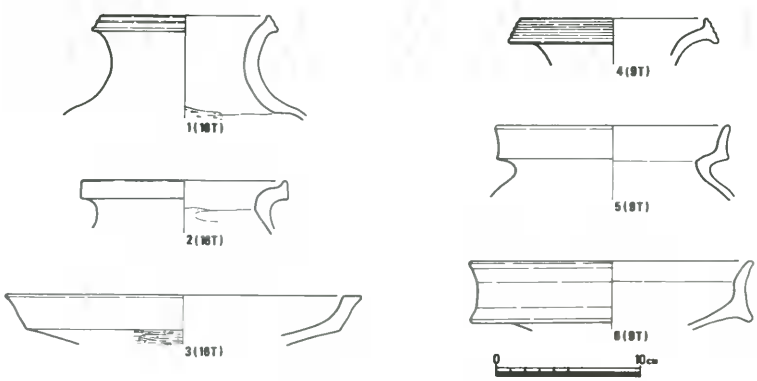
II　寺院関係以外の遺構と遺物

A　寺院創建以前の遺構と遺物

弥生時代に属する遺構は16Tで検出された。掘り下げていないので詳細は不明であるが，おそらく円形を呈する住居址と考えられる。その埋土より若干の弥生式土器が出土しており，後期初頭に位置づけられるものである。住居址以外明確な遺構は検出されていないが，埋土が黒色土の溝状遺構などは弥生時代のものである可能性もある。17Tでは時期が明確でないが，方形を呈すると考えられる落ち込みが検出されている。

遺物は塔や講堂周辺では全く出土せず，西側や南側の低い所より出土する。ここは耕作土直下に弥生式土器を包含する黒色土層が厚く堆積している。しかし遺物の量は僅かであり，中期後半より古墳時代初期のものが認められる。以下図示した遺物の説明を加える。

1から3は16Tの住居址から出土したものである。1はゆるく外反する頸部をもつ壷形土器である。口縁端部はやや上下に拡張され，その端面には退化した凹縁がめぐる。頸部から口縁部内外面の横のナデ，頸部内面下端までヘラ削りにより調整されている。色調は淡乳褐色を呈する。2は甕形土器で強く外反した口縁端部をやや上方に拡張し，その端面には横ナデによる凹部がめぐる。口縁部は内外面とも横ナデ，内面頸部まではヘラ削りにより調整される。胎土に砂粒を多く含み，赤茶褐色を呈する。



第30図　弥生式土器

4から6は9Tの黒色土層から出土したものである。4はラッパ状に開く口縁部をもつ壷形土器である。口縁端部は上下に拡張が著しく，端面には多条化した凹縁がめぐる。色調は赤褐色を呈する。5は二重口縁を持つ甕形土器である。砂粒を多く含み，赤褐色を呈する。6も二重口縁を持つ壷形土器で，口縁端部は上方へやや外反しながら長く立上る。内面はヘラ磨きで丁寧に調整されており，赤褐色を呈する。

B　寺院廃絶後の遺構と遺物

寺院廃絶後の遺構は1Tの瓦溜りに掘り込まれた掘立柱建物が検出された。3間×2間の東西棟建物で，柱間寸法は不揃いである。桁行総長は1.75 *m*を測る。

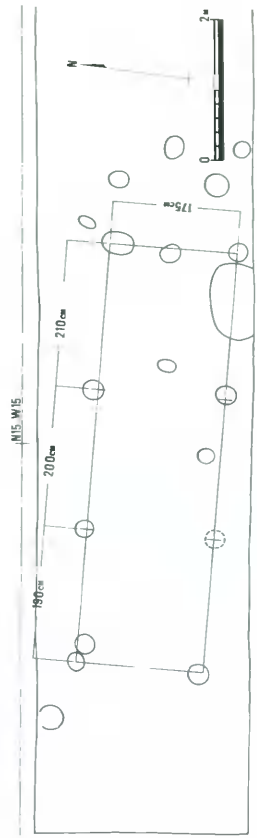
その他各トレンチに柱穴が認められるが，範囲が狭いことから明確に建物としてまとまるものはなかった。

遺物は土師質の皿が，土壙や柱穴から出土している。以下遺物の説明を加える。

1は口径11.5 *cm*，器高2.5*cm*を測る。口縁部は強く開いて，やや深い器形となる。底部には細かな板目が認められる。色調は赤褐色を呈する。

2・3は4Tより出土したものである。2は高台状の厚い底部となり，ヘラ切り痕が残る。軟質で，淡茶褐色を呈する。3は推定口径13*cm*，器高3*cm*を測る。胎土に砂粒多く含み，淡褐色を呈する。

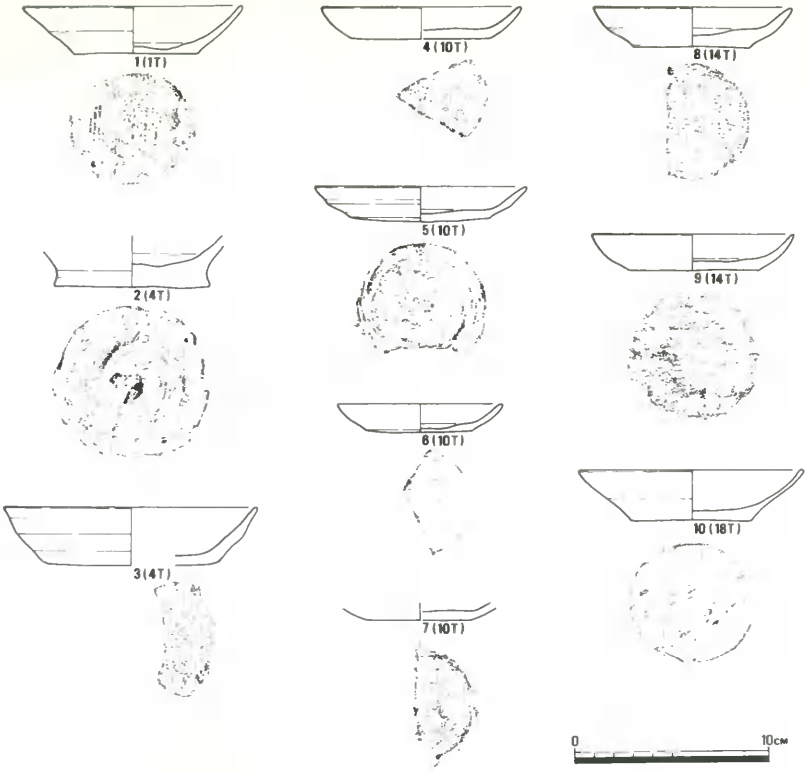
4～7は10Tで出土した。4は小型で浅い器形をなす。推定口径10.4 *cm*，器高1.7*cm*を測る。底部にはヘラ切り痕が残る。色調は赤褐色を呈する。5は口径11*cm*，器高1.9*cm*を測る。口縁部内外面とも横ナデにより調整され，底部にはヘラ切り痕が残る。色調は赤褐色を呈する。6は小型で，口径8.6*cm*，器高1.5*cm*を測る。底部はヘラ切りである。色調は茶褐色を呈する。7は底部破片で，細かな板目が認められる。色調は淡褐色を呈する。



第31図　中世の遺構

8・9は14Tの北端で検出された建物の雨落溝の埋土から出土した。8は口径10.3*cm*，器高2.2*cm*を測る。底部には細かな板目が認められる。色調は淡黄褐色を呈する。9は口径10.4 *cm*，器高2*cm*を測る。口縁部内外面とも横ナデにより調整され，底部には荒い板目が認められる。色調は淡赤褐色を呈する。

10は18Tの柱穴より出土した。やや大型で深い器形をなし，口径11.6 *cm*，器高2.6*cm*を測る。口縁部内外面とも横ナデにより調整され，底部には板目が認められる。色調は赤褐色を呈する。



第32図　土　師　器

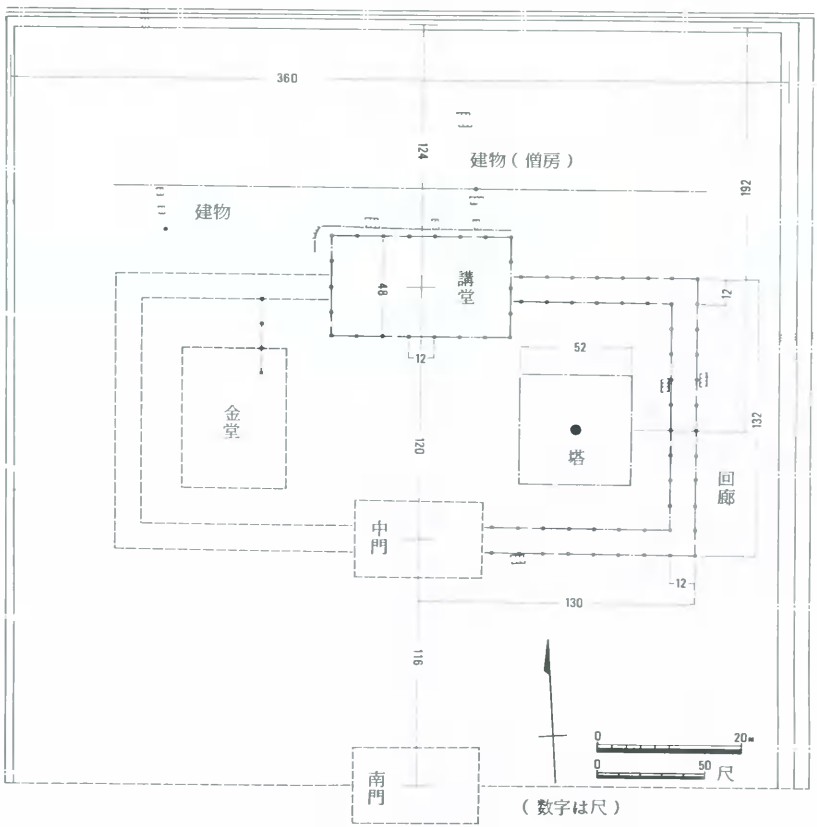
註

註1　昭和5年発刊の「岡山県通史」によれば，塔心礎は小字高倉6440番，小字遠正6439番にあったと記されている。ところが昭和13年に心礎が抜き取られてしまった。持ち去られて以後その所在については不明であったが，京都にあることが昭和40年に確認された。現在は京都市の善田喜一郎氏宅の庭石となっている。

第4節　小　　結

今回の調査で多少なりともその痕跡が認められた堂塔は，塔・講堂，中門・回廊とその他の建物である。これらの堂塔は，西，北，東でそれぞれ確認された，溝，あるいは築地状の遺構が区画する方1町内に計画的に配置されていると考えられる。そこで調査の成果から主要伽藍の復原を試み，さらに寺域内での位置関係なども検討してみることとする。

塔は西と東の端が検出されたことから，乱石積基壇で1辺が15.6 mであることが判明したが，北と



第33図　伽藍推定図

南については確認できなかった。したがって塔の東西方向はうごかないが，南北方向については確定的ではない。しかし塔の中心に位置する心礎の抜き取り穴の一部が検出されていることからほぼ南北の位置を推定した。心礎抜き取り穴はその北東端が検出されており，心礎の大きさが約2mを測ることから，最低1mは南東に寄らなければならない。こうして推定した心礎の中心は回廊の柱並びと一致することから，ほぼ間違いないものと考えられる。塔基壇は上部が削平され，四天柱，側柱などを支える礎石は現存していないことから，塔の上部の規模を推定するのは難しいが，基壇の規模と心礎の大きさなどから考えると五重塔以上が想定される。

金堂については何ら手掛りがなく，まず金堂が建てられていたかどうかが問題になると考えられるが，それを検討する資料もない。しかし中門から講堂に取り付く回廊が中軸線から，南西対象にあったと考えれば，回廊に囲まれた西側が空くことになりそこに金堂を想定することが可能である。ただ西側で検出された掘立柱列が寺の方位と一致し，しかも講堂から西へ回廊を想定すれば，その柱通りと一致することから，これを回廊だとすれば，回廊に囲まれた西側は建物を建てる空間がなくなってしまうことになる。しかしこの想定は他の回廊部がすべて礎石であるのに，ここだけ掘立柱としなければならず不自然さを感じさす。

中門は規模などについては明確にし得なかったが，水田がここだけ南に張出していることや，トレンチにより版築状に積まれた基壇地業と考えられるものが確認されていることから，ここに中門を推定して間違いないと考えられる。このことは中門に取り付く回廊の位置と整合することからも肯定される。

講堂と推定した建物は4間×7間と考えられた。この建物が寺院中軸線から東西対象に設計されていたとすれば，西の基壇端が検出されていることから，推定される東西の基壇の長さは約30mとなる。これを中軸線の東西で検出した，礎石抜き取り穴から考えられた柱間寸法360cmで，左右対象に割ってゆくと7間が考えられる。南北については，南側で礎石抜き取り穴が検出されたことから，梁行総長14.4mを測り，これを3.6mで割ると4間となる。この梁行4間の中心に回廊が取り付いている。

その他の建物は講堂の北側に雨落溝と掘方が，西北部にも雨落溝と掘方が検出されている。これらの建物が何であるのかは想定し難いが，講堂北側の建物は僧房と考えてよいと思われる。

寺域については，南門あるいは南限を示す遺構が検出されなかったが，西・北・東で確認できた，溝，あるいは築地状遺構が寺域を画するものと考え，その溝の中心から中心を測ったところ108mとなり，ほぼ方1町の寺域を想定した。

次にこれまで検討した堂・塔が寺域内でどのような配置を示すか考えてみる。まず寺院の中軸線であるが，真北より東に4度偏している。この方1町の中軸線上には南より南門，中門，講堂が並ぶ。これらは南北にほぼ三等分されたとも考えられるが，それぞれ4尺ずつ異なっている。中門から左右に回廊が出ており，塔・金堂をとり囲み講堂に取り付くと推定される。回廊の柱間寸法は12尺を測る。回廊に囲まれた塔は少し南に寄って作られている。これらのことから英賀廃寺は法起寺式，あるいは観世音寺式の伽藍配置をとると考えられる。

第34図　吉備寺式瓦の分布図

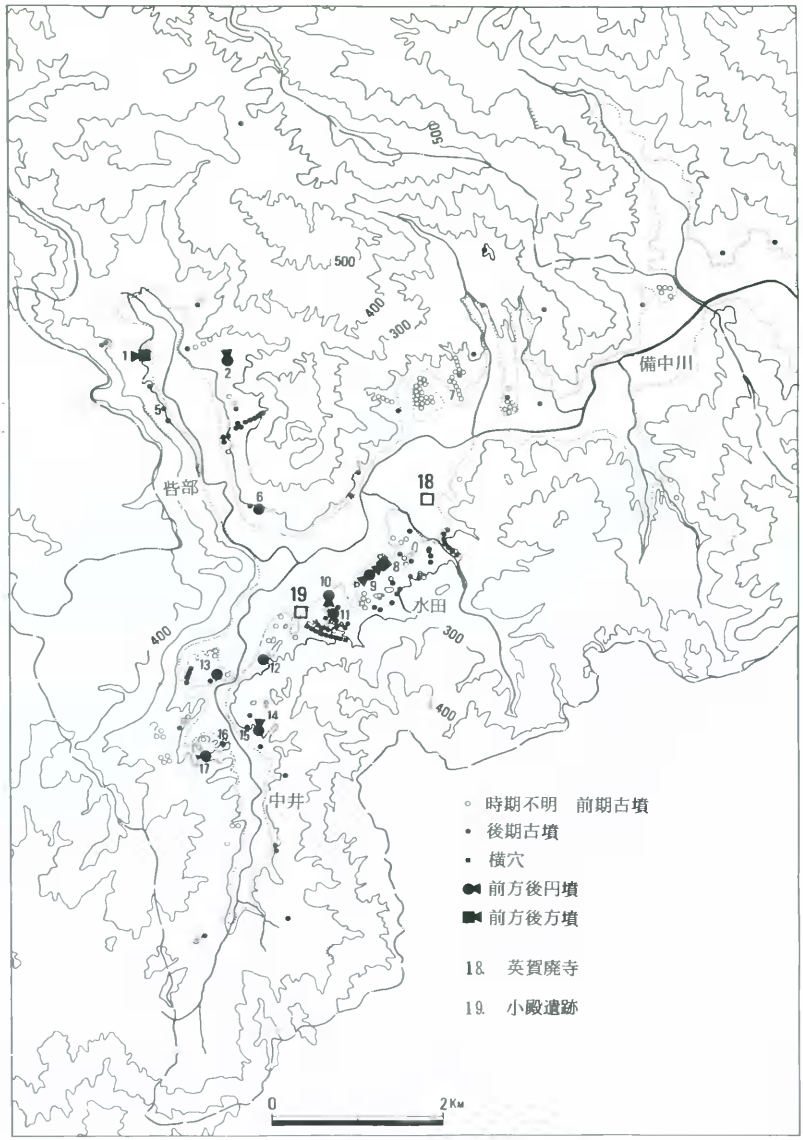
第V章　結　　語

古代英賀郡は備中国の北東端に位置し，東は美作国真嶋郡に，北は伯耆国，西は哲多郡，南は賀夜郡にそれぞれ接している。その郡域は現在の町村名で，北房町，大佐町，新見市唐松などの地域と考えられ，「和名抄」から6郷よりなっていることが知られる。これら6郷の地理的・歴史的環境については前述したが，古墳分布から見て北房町に比定される呰部，中井，水田の3郷が際立っており，特に水田郷は首長墓の系列的展開から，有力豪族の本貫地として特に際立った地域と言える。このような歴史的環境から水田郷に郡衙が想定されるのは当然とも言える。今回の調査で出土した小殿遺跡の掘立柱建物は，郡衙に認められる倉庫が検出されてないとは言え，計画的な建物配置をもつと推定され，また建物の方位が英賀廃寺と同じ真北より4度東に偏していることは計画的な一体性が考えられ，郡衙である可能性が強く感じられる。このことは陶硯などの遺物からも言える。

英賀廃寺は方一町の寺域をもつと推定され，金堂は検出できなかったものの，法起寺式あるいは観世音寺式の伽藍配置が考えられる。今回の調査結果から見る限り，塔だけは大規模なものが建てられていたようで，私寺で基壇の一辺が52尺もあるものは全国的にみても少ない。創建は軒丸瓦1類の示す時期，つまり白鳳期と考えられ，平安時代まで存在したものと考えられる。

英賀廃寺出土の瓦は吉備寺式と言われているものと同じ文様構成をもつが，蓮子の数や，間弁が一部異なるものも認められる。しかし基本的には重弁蓮花文の外を裾歯文，連珠文，裾歯文で飾っている。この瓦は第34図で示すように備中国に分布しており，律令体制以前はどちらかと言えば美作文化圏に属する地域ではあるが，備中国内での同族的結合を強めていると言える。

第35図　岡山県の寺院分布図



第36図　北房町の古墳分布図

1.　小殿遺跡の遠景（北から）

2.　小殿遺跡の近景（東から）

図版　2

1.　ＡＴの遺構（南東から）

2.　ＡＴ南拡張区の遺構（東から）

1.　ＡＴ南壁断面（北から）

2.　ＡＴ南拡張区柱掘り方検出状態（南から）

図版　4

1.　ＢＴ（南から）

2.　ＤＴの遺構（南から）

1.　ＤＴ西拡張区の遺構（東から）

2.　ＡＴ・ＤＴの遺構全景（南から）

図版　6

1.　ＦＴ（南東から）

2.　ＧＴの遺構（南から）

1. 須 恵 器

1.　英賀廃寺の遠景（南から）

2.　瓦窯の遠景（西南から）

1. 作業風景

2. 作業風景

図版　10

1.　塔遠景（東から）

2.　1T瓦溜り（東から）

1.　塔基壇（西から）

2.　1Ｔ塔基壇（西から）

1.　1Ｔ瓦溜り断面（南から）

2.　塔心礎抜き取り穴

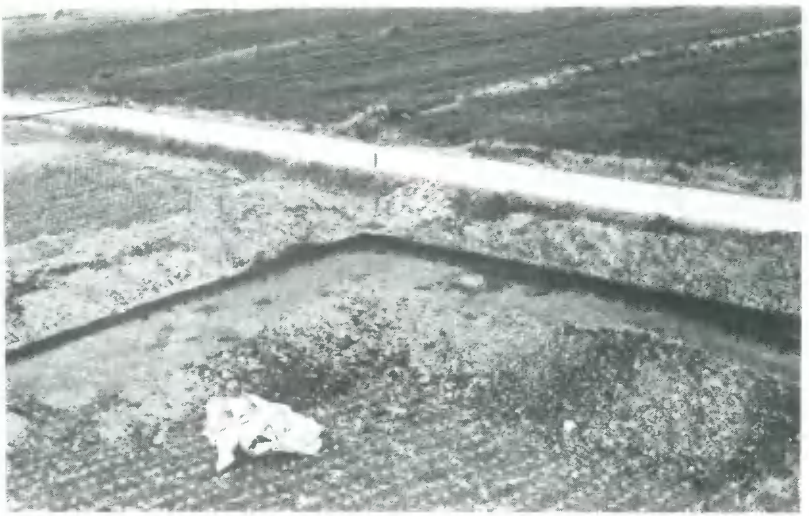
1.　4 T瓦溜り（西から）

2.　4 T塔基壇（西から）

図版　14

1.　4Ｔ塔基壇（東から）

2.　2ＡＴ断面（西から）



1.　3 T（西南から）

2.　3 T（北西から）

図版　16

1.　4Ｔ回廊（東から）

2.　6Ｔ回廊（南から）

1.　講堂全景（南から）

2.　11T（南から）

図版　18

1.　13T（南から）

2.　20T（北から）

1. 14T（南から）

2. 19T（東から）

図版　20

1.　講堂，回廊取り付け部全景（南から）

2.　南門周辺トレンチ全景（北から）

1.　8ＡＴ（北から）

2.　8ＡＴ断面（南から）

図版　22

1. 14T（北から）

2. 16T（南から）

1.　18T（南から）

2.　23T（東から）

1.　寺域南東部（西北から）

2.　寺域東部（西から）

1.　寺域西北部（南東から）

2.　埋め戻し風景（南から）

図版　26

1. 軒　丸　瓦1

2. 軒　丸　瓦2

1. 軒 丸 瓦3

2. 軒 丸 瓦4

1. 軒　丸　瓦5

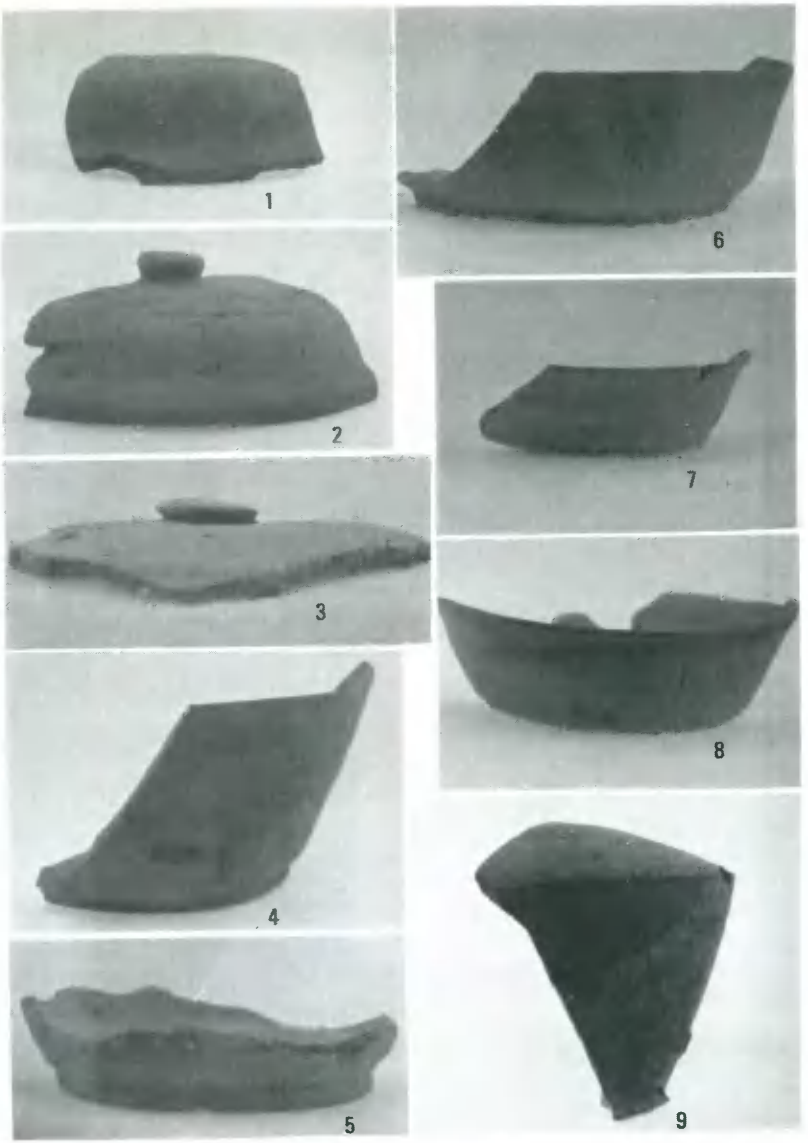
2. 軒　丸　瓦6

1. 軒　平　瓦 1

2. 軒　平　瓦 2

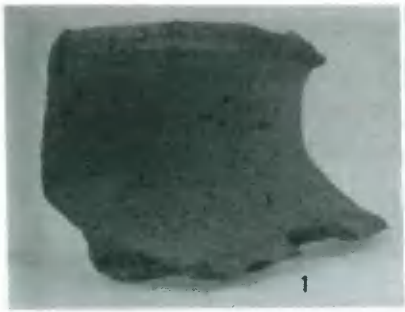
1. 軒　平　瓦 3

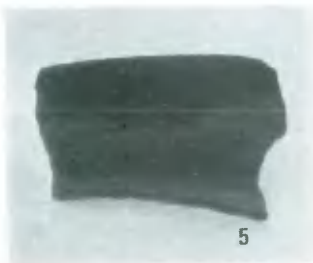
2. 線刻文様瓦



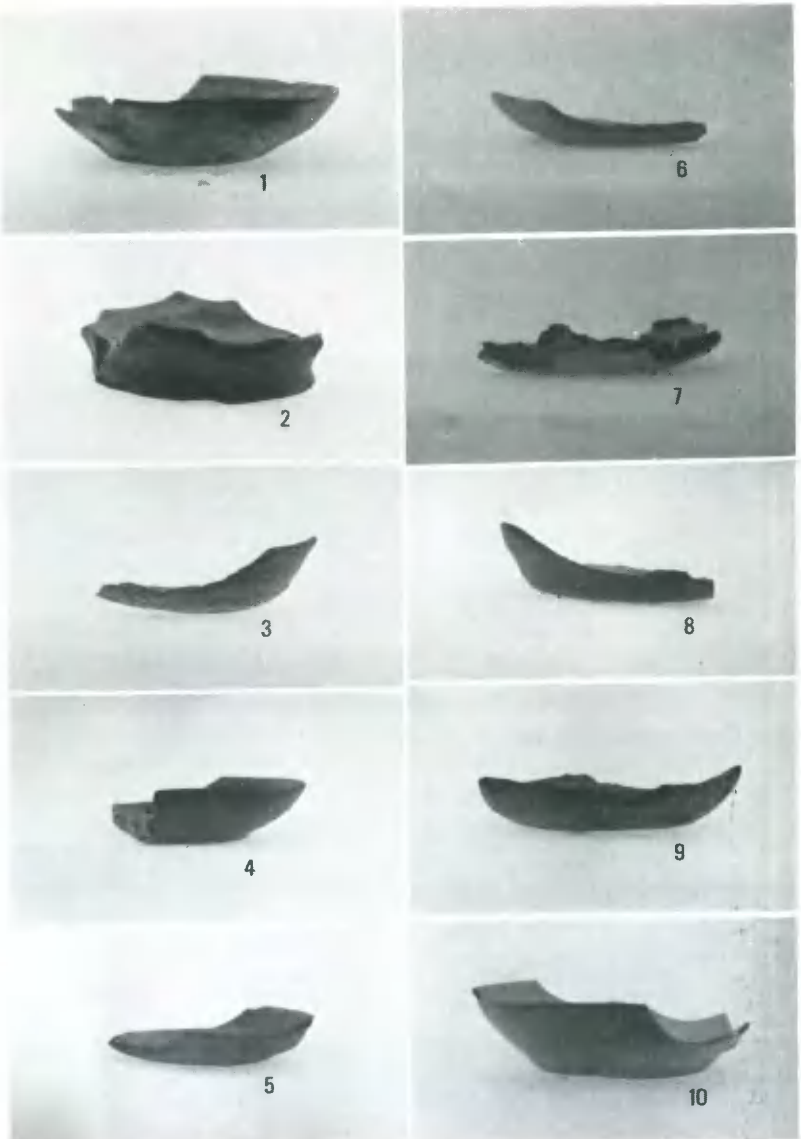
1. 須 恵 器

図版　32



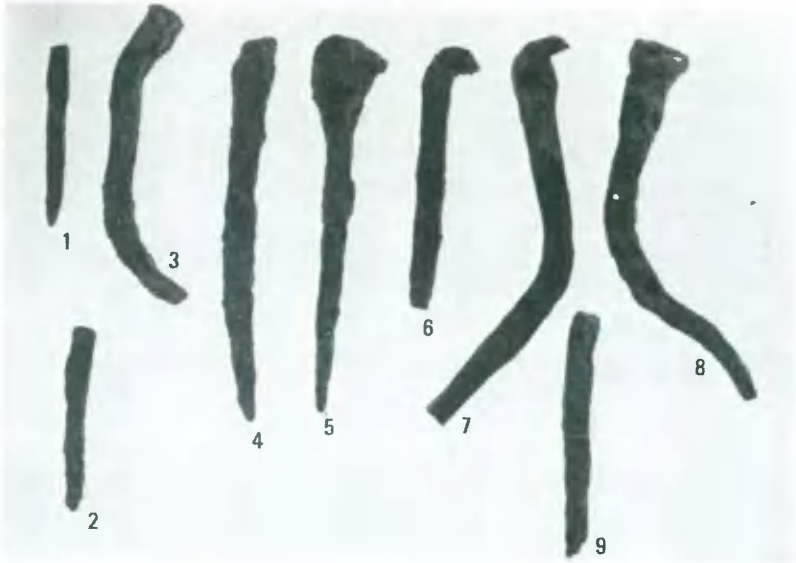


1.　弥生式土器



1. 土　師　器

図版　34



1.　鉄　　釘

2.　小殿遺跡表採の線刻瓦

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（38）

小殿遺跡（英賀郡衙推定地）
英賀廃寺

昭和55年3月27日印刷
昭和55年3月31日発行

編集・発行　岡山県教育委員会
印　　刷　岡山県出納局用度課